

八幡沖遺跡

—宮内地区被災市街地復興土地区画整理事業に係る発掘調査報告書—

平成 30 年 3 月

多賀城市教育委員会

序 文

東北地方太平洋沿岸部に未曾有の被害をもたらした東日本大震災から、早くも7年が過ぎました。この間、県内外から多くの方の自治法派遣を得ながら、職員一同、早急な復旧・復興を達成すべく邁進してまいりました。

今回、本報告書に収録した八幡沖遺跡は、市内でも最も沿岸に近い遺跡のひとつです。遺跡の所在する宮内一丁目地区内では震災後に発生した大津波の影響により、ほぼ全ての家屋が倒壊するという、壊滅的な被害を受けました。

当市では、震災後の復旧・復興については、いち早く現地再建を目指すとの方針を定めました。当該地区については、住民の安全を計るため盛土整備を伴う全面的な整備が必要となり、復興交付金を活用した土地区画整理事業を実施することとなりました。

八幡沖遺跡の発掘調査は、土地区画整理事業との調整を計りつつ、平成26年度から平成28年度までの3カ年に及びました。中世の大規模な区画溝跡の発見や、繙銭・銅椀の出土など、当市沿岸部の遺跡では初めてとなる貴重な発見が相次ぎました。

これらの貴重な文化財を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務であり、当教育委員会では開発事業との円滑な調整を図り、国民共有の財産である埋蔵文化財の適切な保護と活用に努めているところです。

本報告書が、当市の文化財に対する皆様の御理解の一助になるとともに、永く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、当市の復旧・復興に際して支援をいただきました関係機関、発掘調査に対して御理解と御協力を賜りました地権者の皆様をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成30年3月

多賀城市教育委員会

教育長 小畠 幸彦

例　　言

- 1 本書は、宮内地区被災市街地復興土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査（八幡沖遺跡第7次調査）の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、第1次調査からの通し番号である。
- 3 平成14年4月1日の測量法の改正に従い、本書では緯経度の基準を世界測地系で表示している。
- 4 掘図中の高さは、標高値を示している。
- 5 土色は、『新版標準土色帖』（小山・竹原 1996）を参考にした。
- 6 本書の執筆および編集は武田健市が行った。第I章については、『多賀城市文化財調査報告書第131集八幡沖遺跡第13次調査一』第I章に加除筆修正を加えたものである。また、遺物の写真撮影は村松稔、小原駿平、早坂優子が担当した。
- 7 調査に関する諸記録及び出土遺物は、全て多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

I 遺跡の地理的・歴史的環境	1
II 調査に至る経緯と経過	5
III 調査成果	7

調査要項

1 遺跡名	八幡沖遺跡第7次調査
2 所在地	多賀城市宮内一丁目地内
3 調査期間	平成26年5月8日～平成29年1月12日
4 調査面積	約4,990 m ² (対象面積: 約72,000 m ²)
5 調査主体	多賀城市教育委員会 教育長 菊地昭吾 (～平成28年9月30日) 教育長 小畠幸彦 (平成28年10月1日～)
6 調査担当	多賀城市埋蔵文化財調査センター所長 板橋秀徳
7 調査担当者	多賀城市埋蔵文化財調査センター副主幹 村松 稔 中島和彦 (奈良市より自治法派遣) 研究員 熊谷 満 調査員 板垣泰之 村上詩乃 城口貴彰
8 調査協力	宮城県教育委員会 井上主税 (楢原考古学研究所より自治法派遣) 上山佳彦 (山口県教育委員会より自治法派遣) 谷 和隆 (長野県教育委員会より自治法派遣) 東北歴史博物館 相原淳一

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の略称は、次のとおりである。
S B : 据立柱建物跡 SD : 溝跡 SK : 土壙 P : 柱穴
- 2 本文中の「灰白色火山灰」の年代については、伐採年代が907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期存続中に降灰し、承平4年(934年)閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間とする考え方と、『扶桑略記』延喜15年(915年)7月13日条にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ915年とする考えがある(町田洋「火山灰とテフラ」『日本第四紀地図』1987、阿子島功・壇原徹「東北地方、10°C頃の降下火山灰について」『中山久夫教授退官記念地質学論文集』1991)。本書ではこれらの研究成果を基に、灰白色火山灰を10世紀前葉に降下したものとする。

I 遺跡の地理的・歴史的関係

1 位置と現況

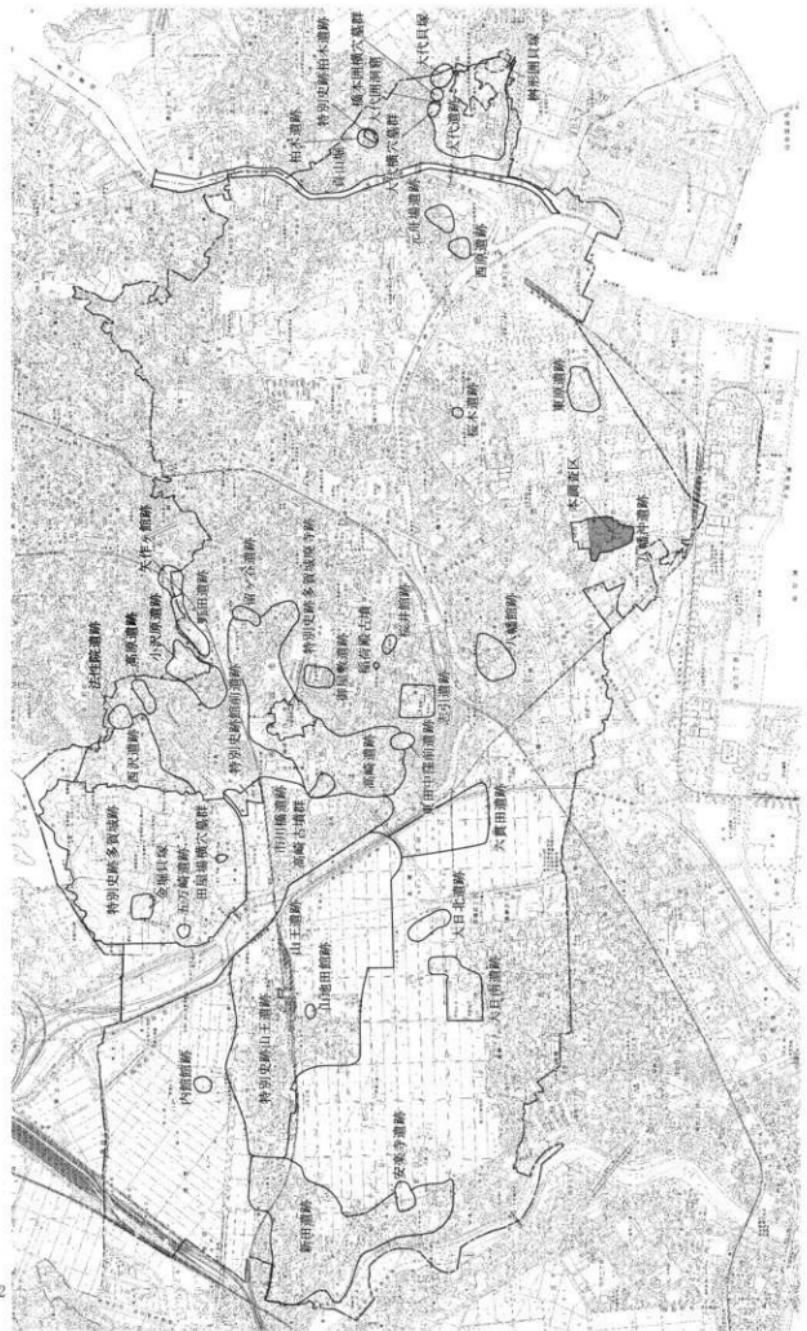
多賀城市は、宮城県の中央やや北寄りに位置し、南西側で仙台市、北西側で利府町、北東側で塩竈市、南東側で七ヶ浜町と接している。本遺跡は市南端部に位置し、海岸線まで約2.5kmの浜堤上に立地している。八幡神社境内を中心に広がっており、範囲は南北約380m、東西約280m、面積は約65,600m²である。現地形はおよそ平坦であるが、八幡神社境内が標高1.9m、遺跡の南側が0.6mと南に向かって緩やかに傾斜している。本遺跡および周辺一帯には昭和17年に多賀城海軍工廠が建設され、戦後は昭和46年の仙台港開港に伴い工場および住宅が造成されるなど、旧地形が大きく改変されている。さらに、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、本遺跡を含む宮内地区は壊滅的な被害を受け、八幡神社から南側の建物はほとんどが解体されるなど、景観が著しく変化している。

2 地理的環境

市内の地形についてみると、中央部を北西から南東方向に貫流する二級河川砂押川を境に、大きくは東側の丘陵部と西侧の沖積地に二分される。砂押川の左岸は地理学上松島丘陵と呼ばれる標高40m前後の低丘陵であり、南側に向かって枝葉のように延びている。一方右岸一帯は宮城野海岸平野と呼ばれる広大な沖積平野の北端部にあたる。現在は標高1~5mとおよそ平坦な地形となっているが、地形分類図によれば、海岸線に沿って浜堤列が発達し、内陸部には後背湿地や旧河川などが入り組んだ複雑な地形であったことが知られる。このうち本遺跡については、南北約3.3km、東西約1.1kmと規模の大きな浜堤列上に位置している。なお、昭和23年に米軍が航空撮影した写真には八幡神社南西側に大きく張り出す水田が確認でき、そこはかつて祓沼と呼ばれる沼が埋没した跡であるという。範囲確認のための試掘調査でも、遺跡の西隣は湿地状の地形であることを確認しており、祓沼の一部であると考えられる。



第1図 八幡沖遺跡と周辺遺跡



第2図 市内の遺跡と調査区の位置

3 歴史的環境

(1) 周辺の遺跡について

本遺跡の周辺では、いくつかの遺跡が知られている（第1図）。南西約400mの位置にある沼向遺跡（仙台市）では、弥生時代から近世の遺構・遺物が確認されており、特に古墳時代前期では海岸線近くに円墳が確認されるなど、当該期の沿岸部の様相を知る上で貴重な成果をあげている。また、遺跡の詳細は明らかではないが、東約600mには古代の遺物包含層として登録されている東原遺跡が所在している。また、埋蔵文化財包蔵地の範囲外であるが、本遺跡西側約300mの地点からも古墳時代後期の栗田式にあたる土師器甕が出土している（註1）。なお、本遺跡内に所在する八幡神社については、安永3年（1774年）の『風土記御用書出』に「古館八幡社之跡 御仮屋之後古館之内古杉老木有之候處往古沖八幡会立候由申伝候事」の記録があり、建保年中（1213～18）の頃に平右馬助（景家、八幡介）が居館を古館に定めたため、宮内に遷宮することになったと伝わっている。

(2) 本遺跡におけるこれまでの調査成果

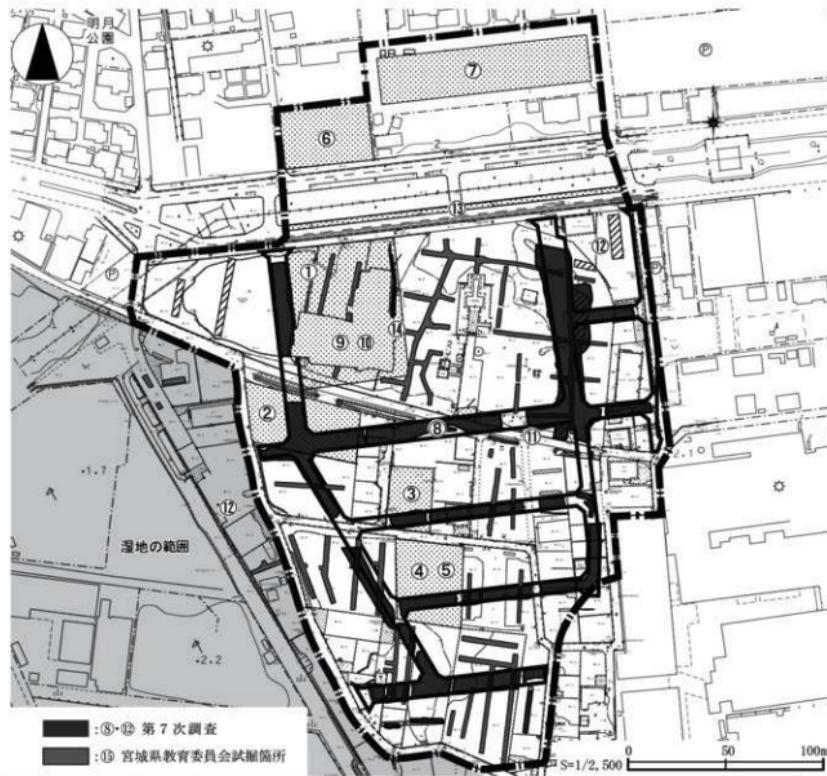
本遺跡は、昭和37年の分布調査において八幡神社境内とその周辺の500mにわたって内面黒色の土師器をはじめとした遺物が散布していたことから、沖の井八幡神社遺跡として『宮城県文化財調査報告書第9集 宮城県遺跡地名表』（1966）に登録されたものである。当時の遺跡の範囲は現在よりも狭く、神社を中心とした南北約200m、東西約180mであった。

発掘調査はこれまで多賀城市教育委員会が12回、宮城県教育委員会が1回行っており、古墳時代後期から近現代にかけての遺構や遺物を発見している（第3図）。以下これまでの成果について記す。

はじめて発掘調査が行われたのは、昭和56年に神社西側隣接地で工場等建設に先立って実施したものである。この時、当該地は埋蔵文化財包蔵地の隣接地であったことから、範囲確認を目的とした試掘調査を行ったが、遺構や遺物は発見できなかった。第2次調査は八幡神社の南西側100mの地点を実施し、掘立柱建物跡や溝跡を発見した。第3・4次調査は、宅地造成に伴い神社の南側130mの同一の敷地内を調査している。このうち第3次調査では、南北に廂があるS B 15掘立柱建物跡をはじめ、溝跡や土壌を発見している。第5・6次調査は、遺跡の北側隣接地で行った範囲確認のための試掘調査で、古代の柱穴や溝跡、土壌、江戸時代に埋没した大溝跡を発見したことから、遺跡の範囲はより北側へ拡がった。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けた宮内地区の復興のため、宮内地区被災市街地復興土地区画整理事業が行われることになった。このため宮城県教育委員会が遺跡の範囲とその内容を把握するための試掘確認調査を平成25年度に行ったところ、神社周辺で古代末頃の土器がまとまって出土したほか、神社北側では古墳時代後期の土師器甕を倒位で埋設した土器埋設遺構を1基発見した。平成26年度からは本市教育委員会が本発掘調査として第7次調査を行い、その結果、現在の神社敷地内から10世紀後葉～12世紀前半頃の土器が多量に出土したほか、15世紀初頭から17世紀末頃にかけて機能した区画溝などを発見した。また、災害公営住宅多賀城市宮内地区整備に伴う本発掘調査として平成26年度から27年度にかけて第9次調査を行った。この調査では、10世紀中葉～後葉頃の桁行3間・梁行2間の身舎四面に庇が付くS B 58掘立柱建物跡のほか、11世紀代のものと思われるS K 35土器埋棄土壌も発見した。さらに遺跡の範囲確認調査として第11次調査を行い、遺跡の北東側を除く範囲をほぼ把握することができた。

註1：多賀城市教育委員会『八幡沖遺跡－第3次調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第47集 1997

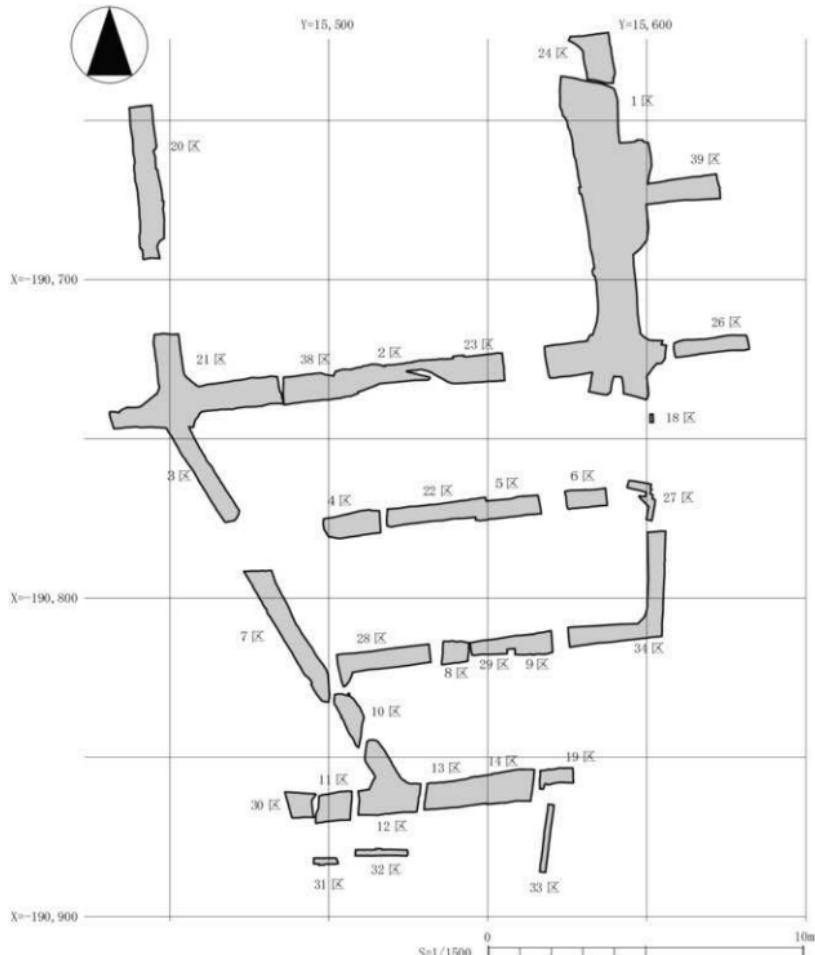


地図番号	調査主体	調査次数	調査原因	調査種類	実施年度	主な発見遺構・遺物	既刊報告書	備考
1	多賀城市 教育委員会	一	工場建設	範囲確認のための試掘調査	昭和 56 年度		—	
2		第1次	土地売買	範囲確認のための試掘調査	昭和 62 年度	溝跡	第 16 集	
3		第2次	宅地造成	確認調査	平成 3 年度	掘立柱建物跡	第 33 集	
4		第3次	宅地造成	確認調査	平成 9 年度	掘立柱建物跡、溝跡、土壤	第 47 集	
5		第4次	宅地造成	本発掘調査	平成 16 年度	溝跡、土壤	第 80 集	
6		第5次	社員寮建設	範囲確認のための試掘調査	平成 19 年度	溝跡、土壤	第 96 集	
7		第6次	工場建設	範囲確認のための試掘調査	平成 24 年度	溝跡、柱穴	—	復興
8		第7次	上地区画整理事業	本発掘調査	平成 26 年度～	区画溝、片口跡、土壤	—	復興
9		第8次	災害公営住宅建設	確認調査	平成 26 年度	掘立柱建物跡(近世以降)	—	復興
10		第9次	災害公営住宅建設	本発掘調査	平成 26 年度	掘立柱建物跡、溝跡、土壤	第 125 集	復興
11		第10次	鳥居移築	本発掘調査	平成 26 年度	溝跡、土壤	—	復興
12		第11次	上地区画整理事業	範囲確認のための試掘調査	平成 26 年度	溝跡	—	復興
13		第12次	公共下水道雨水工事	本発掘調査	平成 27 年度	溝跡	—	復興
14		第13次	災害公営住宅建設	本発掘調査	平成 28 年度	溝跡	本報告書	復興
15	宮城県 教育委員会	一	上地区画整理事業	試掘確認調査	平成 25 年度	掘立柱建物跡、溝跡、土壤		復興

第3図 第7次調査区と過去の調査一覧

II 調査に至る経緯・経過

本調査は、宮内地区被災市街地復興土地区画整理事業に伴う確認及び本発掘調査である。当該事業については、東日本大震災で発生した大津波により壊滅的な被害を受けた宮内地区的現地再建を図るものであることから、早急な事業完了が求められた。対象となる範囲が遺跡全城に及ぶほど広大であることから、本調査に先立ち平成25年4月15日から宮城県教育委員会による試掘調査が行われた結果、八幡神社を中心とした調査区の配置図を作成した。



第4図 調査区配置図

心に、古墳時代後期から近世にかけての遺構・遺物が多数確認された（註2）。これにより、平成26年度の本発掘調査着手に向けた本格的な協議が開始することとなった。一方、震災復興に係る住宅再建及び生活再建は内陸部の遺跡内でも急増しており、当該調査の大部分が原則確認調査であることを考慮しても、本市の現有調査員ではこれら全ての調査を円滑に進めるには限界があった。このため、宮城県教育委員会に対して調査員の派遣を要請し、平成26年度調査の協力をいただくこととなった。

調査は26年5月より開始したが、震災後3年を過ぎたばかりであり、未だ住宅の基礎が調査対象区に当時のまま残存している状況であった。また、僅かに残った家屋の移転協議も同時並行で進められていたことから、その時点できちんと着手できる箇所から表土掘削を行うこととなった。当初、最も遺構が多く存在すると想定した神社周辺は立ち木の撤去が進んでいたため、およそ計画どおりの調査区（1区）を設定することができた。予想通り多くの遺構・遺物を確認したが、境内から南に外れると遺構は希薄となり、遺跡南半部にいたっては明確な遺構が存在しない箇所もみられた。また、近代以降の構跡や土壌など、後世の搅乱がいたるところに存在しており、神社周辺を除くと遺構の残存状況は極めて悪い状況であった。このため、1区の調査を継続しつつも、遺構・遺物が希薄である調査区を早急に終了させ、7月以降は1区の調査に集中できるような工程とした。

以後、調査員が分散し、各調査区の遺構確認、写真撮影、測量等の記録を随時行った。

7月に入り、1区の調査を本格的に開始した。この結果、調査区を南北に縦断する大規模な区画溝や井戸跡、多数の土壌を確認した。これらの成果がおよそまとまった10月11日に遺跡見学会を開催し、広く調査成果を一般公開した。

一方、調査を継続していた1区において若干の設計変更が発生するなど、当初計画が変動する事態が見られた。また、震災以前の擁壁や道路撤去が進まない場所もあり、平成26年度中に調査着手に至らない箇所も明らかとなってきた。このため、1区の調査が終了した平成27年1月中旬以降は、図面整理などの屋内作業を重点的に行い、3月から再度現地調査を開始することとなった。

平成27年度以降は、現地環境が整うごとに調査に着手することとなった。遺構が密集する箇所は平成26年度に終了しているものの、散発的に発生するこれら調査にも早急な対応が必要であったが、平成29年1月12日をもって、当該事業に係る現地発掘調査の一切を終了した。

註2：宮城県教育委員会「1) 八幡沖遺跡」『平成25年度東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告書II』 宮城県文化財調査報告書第236集

III 調査成果

(1) 層序

本調査区は、1～1.5mある近現代の厚い盛土層（I 1：現代の表土、I 2：擾乱層）に覆われている。多くの調査区は、この盛土層下に暗褐色砂層の遺構検出面（II層）が存在している。1区では、II層上面で古代・中世・近世の遺構が確認できるが、この遺構検出面にも近現代の溝跡や土壤など多くの擾乱が及んでいる。

なお、本地区東側では栗間式期の土師器甕が出土しており、当該期の遺構の存在も視野に入れ調査を行ったが、II層以下には遺構面となり得るような安定した地盤は存在せず、今回の調査で明らかにすることはできなかった。

(2) 発見した遺構と遺物

ほとんどの遺構をII層上面で確認している。浜堤上に立地する遺跡のため、自然に形成された浅い窪みと、人工的に掘り窓められた残存状況の悪い土壤を厳密に区別することが困難であったため、ここでは明らかな自然の窪みや擾乱と判断したもの以外は、極めて浅い窪みであっても遺構として扱うこととした。

S B 70 挖立柱建物跡（第5・33）

【位置】7区北部で発見した。

【桁行・梁行】7基の柱穴（P 1～7）から推測した建物跡である。桁行4間以上、梁行1間の南北棟であり、柱の配置から建物中央から南半部である。

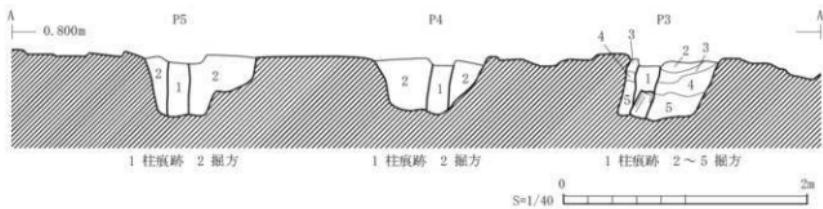
【柱痕跡・柱抜取り穴の有無】P 2～5で柱痕跡を確認した。

【重複】SK 71と重複し、それよりも古い。

【方向・規模】方向は西側柱列で測ると、北で約8度東に偏している。桁行の規模は、東側柱列で測ると総長7.8m以上、柱間は南から1.83m、1.90m、約1.9m、約2.2mである。梁行は3.77m（約2間分）である。

【掘方】西側柱は南北に長い方形または不整形であり、南東隅柱は東西に長い不整形である。規模はP 5で測ると長軸約1m、短軸0.5mである。埋土は粘性のあるオリーブ褐色砂（2.5Y4/4）が主体であり、地山起因の暗褐色砂（10YU3/3）が多量に混入している。締まりは非常に弱い。

【柱痕跡】平面形は直径14～22cmの円形であり、埋土は暗オリーブ褐色土（2.5Y3/3）である。



第5図 S B 70 断面図

【遺物】出土していない。なお、7区の柱穴については出土遺物がないことや、埋土の縮まりも緩く本市西部地区の山王遺跡で確認している近世以降の柱穴跡と近似している様子が窺えたことから、P 2の柱材について放射性炭素年代測定を行った。この結果、19世紀頃の年代が示されている。

S B 74 堀立柱建物跡（第35図）

【位置】9区南端部で発見した。

【桁行・梁行】2基の柱穴（P 1。2）から推測した建物跡である。東西2間以上であり、建物跡の北端部であると推測できる。

【柱痕跡・柱抜取り穴の有無】P 1・2で柱痕跡を確認した。

【重複】他の遺構との重複はない。

【方向・規模】方向は西で6度11分北に偏している。柱間は3.28m（2間分か）である。

【掘方】南北に長い梢円形である。規模はP 1で測ると長軸約1.2m、短軸0.9m、深さ約40cmである。埋土は暗オリーブ褐色砂（2.5Y3/3）、オリーブ褐色砂（2.5Y4/3）が主体であり、次山起因の褐色砂が多く混入している。

【柱痕跡】平面形は直径16～20cmの円形であり、埋土は黒褐色粘質土（2.5Y3/2）である。

【遺物】出土していない。

S B 75 堀立柱建物跡（第44図）

【位置】27区北部で発見した。

【桁行・梁行】4基の柱穴（P 1～4）から推測した建物跡である。桁行3間以上、梁行推定2間の東西棟であり、柱の配置から建物中央部であると考えた。

【柱痕跡・柱抜取り穴の有無】P 1で柱抜取り穴を確認した。

【重複】S B 76と重複し、それよりも新しい。

【方向・規模】方向は北側柱列で測ると、東で約15度南に偏している。桁行の規模は、北側柱列で測ると総長4.4m以上、柱間はP 2・3間で約2.4mであり、梁行は約3.7m（約2間分）である。

【掘方】西側柱は南北に長い方形または不整形であり、南東隅柱は東西に長い不整形である。規模はP 5で測ると長軸約1m、短軸0.5mである。埋土は暗褐色砂質土（10YR3/3）である。

【遺物】出土していない。

S E 84 井戸跡（第6・20図）

【位置】1区北東部で発見した、縦板組の井戸跡である。

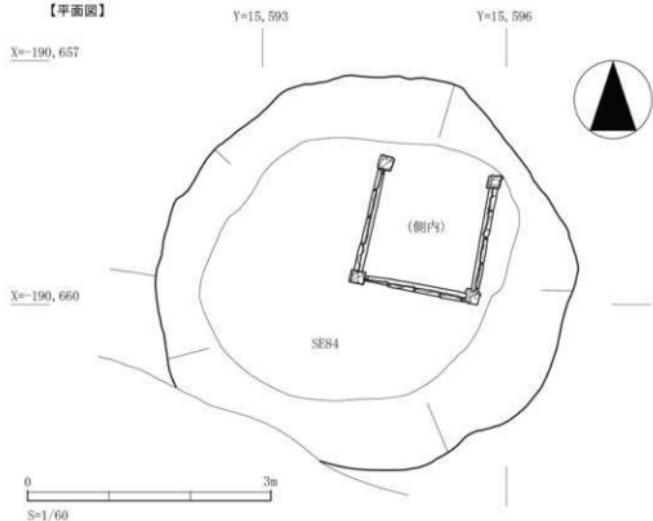
【重複】SD 86、SX 99と重複し、SD 86より古く、SX 99よりも新しい。

【掘方の形態・規模】平面形は南北に長い方形を基調としており、規模は南北約5m、東西3.7mである。深さは80cmであり、壁は垂直気味に立ち上がる。

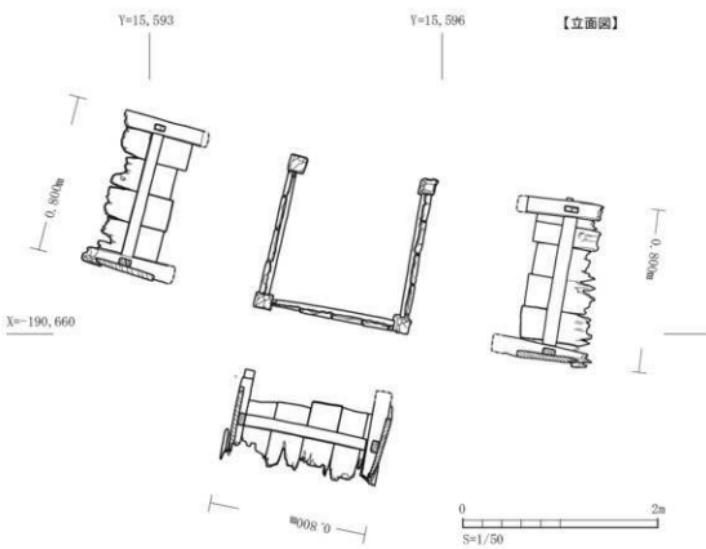
【掘方埋土】黄灰色砂（2.5Y4/1）と黒色砂（2.5Y2/1）の互層である。

【井戸側の位置・規模】掘方北寄りに設けられている。規模は内法で一辺約1.1m、縦板は約60cm残存している。

【平面図】



【立面図】



第6図 SE84 平面・立面図

【井戸側の構造】四隅に一辺 14 cm の角材を支柱とて設置し、この支柱外辺の合わせるよう幅 15 ~ 30 cm、厚さ 4 ~ 5 cm の縦板を配している。また、縦板底面から約 25 cm の位置に穿った納穴に横桟を渡し、側板を補強している。

【側内埋土】暗褐色砂（10YR3/3）が主体であり、黒褐色粘質土（10YR2/2）が混入している。

【出土遺物】元豊通寶・政和通寶（北宋錢）ほか、錢貨の小片が出土している。

SD 86 溝跡（第 8・9・20 ~ 25 図）

【位置】1 区中央部を南北に縱断する溝跡である。最も新しい D 期でみると、北側で SD 81 東西溝跡と連結しているほか、南側でも西側に屈曲する様相が窺えることから、方形区画溝の東部分と判断できる。また、規模や方向、位置関係から、23 区 SD 101 東西溝跡や、西側近接地の第 9 次調査 SD 40 南北溝跡と一連のものと考えられる。

【重複】北東部で SE 84、SX 99、南端部で SD 89・92・94 と重複し、それより新しい。

【変遷】4 時期の変遷（A → D 期）を確認した。新しい段階の C・D 期については様相を把握することができたが、古い段階の A・B 期については部分的に確認したに過ぎない。

【構造】新しい段階の D・C 期では単体の方形区画溝であるが、B 期では北側で SD 77 南北溝と、東側中央付近で SD 87・88 東西溝と接続しており、外側にも複数の区画が存在した可能性がある。

【方向・規模】D 期で測ると、方向は北で約 10 度東に偏している。規模は長さ約 103 m、上幅 3.5 ~ 4.8 m、深さ 0.8 ~ 1 m であり、南に向かって低くなっている。

【壁・底面】各期とも、壁は非常に緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】第 3 ベルトが最もよく残存している。A 期で 2 層、B 期 1 層、C 期 4 層、D 期 4 層に細分できる（第 8 図）。いずれも砂層が主体であるが、D 期 2 層に亜泥炭薄層の堆積が認められるほか、A 期最下層には炭化物が多量に混入している。

【遺物】B 期上面から永樂通寶を含む縮銭や銅製の小型椀、木製舟形代、D 期 1 層から中世の無釉陶器や 17 世紀後半頃の陶器擂鉢（瀬戸）が出土しているほか、D 期 1・2 層を中心に 10 ~ 12 世紀頃の土器片が多量に出土している。

SD 89 溝跡（第 7・24・25 図）

【位置】1 区南端部で確認した東西方向の溝跡である。東側に向かうにつれ規模が縮小し、南に屈曲する。

【重複】SD 86、SK 90・91 と重複し、それよりらも古い。

【方向・規模】方向は東で約 12 度南に偏している。規模

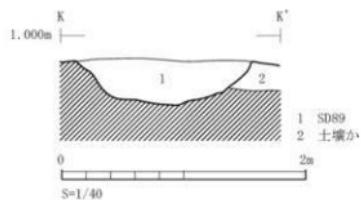
は長さ 27 m 以上、上幅は西側が 1.3 ~ 2.2 m、東側が 0.7

~ 1 m、深さは調査区西端で測ると、約 40cm である。

【壁・底面】壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】黒褐色砂（2.5Y3/2）の単層である。

【遺物】須恵系土器が出土している。

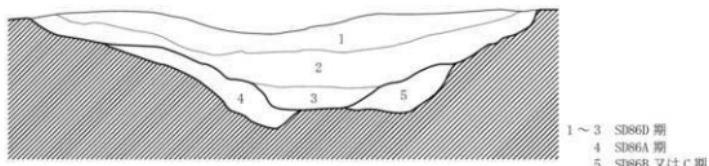


第 7 図 SD 89 断面図

【第1ベルト】

B
1,000m

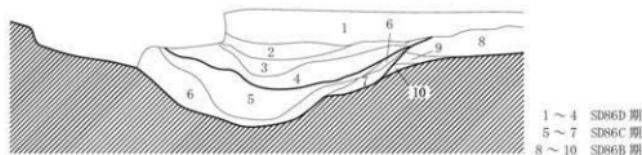
B'



【第2ベルト】

C
1,000m

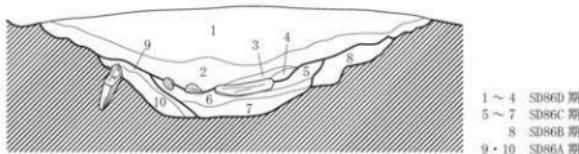
C'



【第3ベルト】

D
1,000m

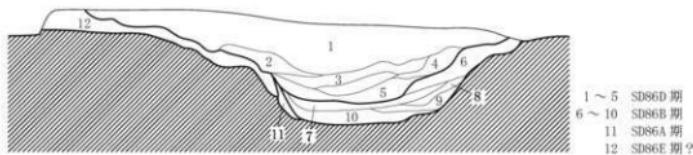
D'



【第4ベルト】

E
1,000m

E'



0
S=1/40

第8図 SD86 断面図

第1ベルト			特徴
剖位	土色	土性	
1	10YR2/2 黒褐色	粘質	植物・木の根が多く混入
2	10YR3/3 喷褐色	砂質	
3	10YR3/1 黒褐色	砂	10YR2/2 砂質土多量に混入
4	2.5Y5/4 黄褐色	砂	10YR3/3 喷褐色砂が多量に混入
5	10YR3/2 黑褐色	砂質土	2.5Y5/4 黄褐色砂と 10YR2/2 黑褐色砂が薄層状に堆積
6	2.5Y5/4 黄褐色	砂	
第2ベルト			特徴
剖位	土色	土性	
1	10YR3/1 黑褐色	砂質土	10YR5/8 黄褐色砂が斑状に。10YR5/1 喷灰色砂が薄層状に混入
2	10YR4/2 喷灰色	粘質土	2.5Y6/2 喷黄色砂が斑状に多量に混入。※ 割位付近はスクモ状
3	10YR2/2 黑褐色	粘質土	2.5Y6/2 喷黄色砂が斑状に多量に混入。※ 割位付近はスクモ状
4	10YR3/2 黑褐色	砂	10YR2/2 黑褐色粘質土と 10YR5/2 喷黄色砂が薄層状に混入
5	10YR5/1 喷灰色	砂	10YR2/2 黑褐色粘質土が薄層状に混入
6	2.5Y3/1 黑褐色	砂	10YR4/2 喷灰色砂が斑状に多量に混入
7	10YR5/1 喷灰色	砂	10YR3/1 黑褐色砂が薄層状に混入
8	10YR4/1 喷灰色	砂	2層との層面に、地山起因の 2.5Y7/4 浅黄色砂が小ブロック状に多量に混入。 10YR3/1 黑褐色砂が薄層状に混入
9	10YR3/1 黑褐色	砂	1 地山起因の 2.5Y7/4 浅黄色砂が薄層状に混入
10	2.5Y5/3 にぶい黄褐色	砂	10YR3/1 黑褐色砂が薄層状に混入
第3ベルト			特徴
剖位	土色	土性	
1	10YR3/1 黑褐色	砂質土	10YR5/8 黄褐色砂が斑状に。10YR5/1 喷灰色砂が薄層状に混入
2	10YR2/2 黑褐色	粘質土	2.5Y6/2 喷黄色砂が斑状に多量に混入。※ 割位付近はスクモ状
3	10YR3/1 黑褐色	砂	
4	10YR3/1 黑褐色	砂	10YR2/2 黑褐色粘質土が多量に混入
5	10YR3/2 黑褐色	砂	10YR2/2 黑褐色粘質土と 10YR5/2 喷黄色砂が薄層状に混入
6	2.5Y6/4 にぶい黄色	砂	
7	2.5Y3/2 黑褐色	砂	2.5Y6/4 にぶい黄色砂が斑状に混入
8	2.5Y3/1 黑褐色	砂	10YR4/1 喷灰色砂が斑状に多量に混入
9	10YR4/1 喷灰色	砂	2 層との層面に、地山起因の 2.5Y7/4 浅黄色砂が小ブロック状に多量に混入 10YR3/1 黑褐色砂が薄層状に混入
10	10YR3/2 黑褐色	砂	地山起因の 2.5Y7/4 浅黄色砂が小ブロック状に多量に混入
11	10YR3/2 黑褐色	砂	炭化物が多量に混入
第4ベルト			特徴
剖位	土色	土性	
1	10YR3/1 黑褐色	砂質土	10YR5/8 黄褐色砂が斑状に。10YR5/1 喷灰色砂が薄層状に混入
2	10YR2/2 黑褐色	粘質土	2.5Y6/2 喷黄色砂が斑状に多量に混入
3	10YR2/2 黑褐色	粘質土	2.5Y6/2 喷黄色砂が斑状に多量に混入
4	10YR3/1 黑褐色	砂	
5	2.5Y4/1 喷灰色	砂	地山起因 2.5Y7/4 浅黄色砂が多量に混入
6	7.5Y3/2 黑褐色	粘土	堆肥灰層
7	10YR3/2 黑褐色	砂	10YR2/2 黑褐色粘質土と 10YR5/2 喷黄色砂が薄層状に混入。
8	2.5Y5/4 黄褐色	砂	10YR3/2 黑褐色砂が薄層状に混入。
9	2.5Y5/4 黄褐色	砂	10YR2/2 黑褐色粘質土が薄層状に混入
10	10YR2/2 黑褐色	粘質土	堆肥灰層と 2.5Y5/2 砂が薄層状に混入
11	7.5Y3/2 オリーブ黒色	砂	10YR4/1 砂が小ブロック状に多量に混入
12	10YR3/2 黑褐色	砂	炭化物が多量に混入
13	10YR4/1 喷灰色	砂	浅黄色砂が多量に混入

SD 94 溝跡（第 10・25・26 図）

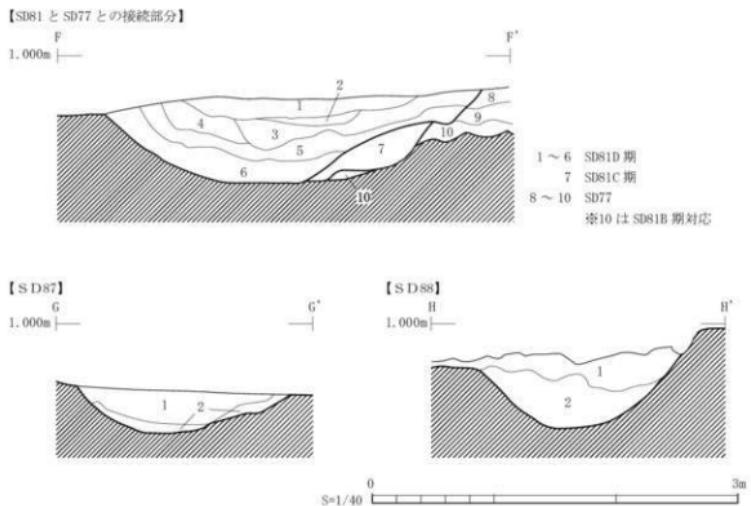
【位置】1 区南端部で確認した東西方向の溝跡である。

【重複】SD 86 と重複し、それよりも古い。なお、新旧関係が確認できるのは、厳密には SD 86 D 期との重複のみである。SD 86 で囲まれた区画内部では確認できないことから、A～C 期に接続していた可能性も考えられる。

【方向・規模】方向は東で約 8 度南に偏している。規模は長さ 12 m 以上、上幅は西側が 1.8 ～ 2.8 m、深さは、約 60 cm である。

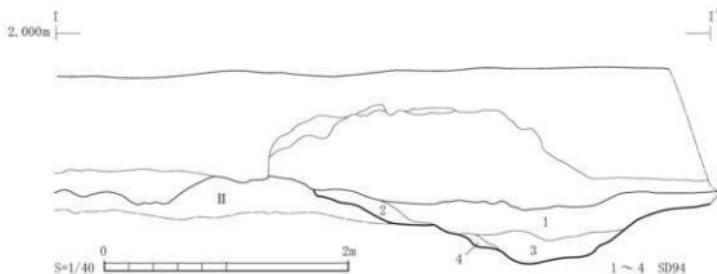
【壁・底面】壁は上半部は非常に緩やかであるが、底面付近になると急角度で立ち上がる箇所も見られる。

【埋土】埋土は 4 層に細分できる（第 10 図）。1 層はにぶい黄色砂（10YR6/4）、2 層は灰黃褐色砂（10YR4/2）、



第9図 SD86B 期接続溝跡断面図

SD 81			特徴
層位	土色	土性	
1	10YR3/4 暗褐色	砂質土	10YR4/4 剛色砂が多量に混入。炭化物、燒上多く混入
2	10YR3/4 暗褐色	粘質土	10YR2/2 黒褐色粘質土、2.5Y6/2 灰黃色砂が斑状に多量に混入。炭化物、燒上多く混入
3	10YR2/2 黒褐色	粘質土	
4	10YR2/2 黒褐色	粘質土	2.5Y4/4 オリーブ褐色砂が薄層状に混入
5	10YR4/4 褐色	砂	10YR3/4 暗褐色砂質土が斑状に混入
6	10YR3/2 黒褐色	砂質土	10YR4/3 に赤い黄褐色砂が薄層状に混入
7	10YR2/2 黒褐色	粘土	10YR2/3 黒褐色粘質土と 10YR4/3 に赤い黄褐色砂が薄層状に混入
8	2.5Y3/2 黒褐色	砂	2.5Y4/4 オリーブ褐色砂、10YR2/2 黒褐色粘質土が薄層状に混入
SD 77			
9	10YR4/4 褐色	砂	10YR4/6 褐色砂が斑状に混入
10	10YR4/6 褐色	砂	10YR4/4 褐色砂が混入
11	7.5Y3/2 オリーブ黒色	砂	10YR4/1 砂が小ブロック状に多量に混入
12	10YR3/2 黒褐色	炭化物	炭化物が多量に混入
13	10YR4/1 褐灰色	砂	浅黄色砂が多量に混入



第10図 SD94 断面図

3層は黒色粘質土が混入する褐色砂（10YR4/1）、4層は灰黄褐色砂（10YR5/2）である。

【遺物】古代の土器片が出土している。

SD 102 溝跡（第11・30図）

【位置】4区東部で確認した南北方向の溝跡である。東西方向のSD 103とおよそ直角に連結している。

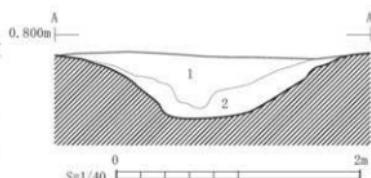
【重複】SK 104～108と重複し、それよりも古い。大部分が近代の溝跡に破壊されており、残存状況は悪い。

【方向・規模】本地区では19.5m分を確認した。

【壁・底面】壁は緩やかであり、底面は丸みを帯びて窪んでいる。

【埋土】2層に細分できる。上層は黒褐色砂（10YR2/1）が混入する暗褐色砂質土（10YR3/3）、下層は灰黄褐色砂がラミナ状に混入する黒褐色砂質土（10YR2/1）である。

【遺物】出土していない。



第11図 SD 102 断面図

SD 109 溝跡（第12・42～44図）

【位置】20区東部から中央を南北に縦断する溝跡である。直接的な重複等は確認できないものの、位置関係や方向から判断すると、東西方向のSD 111・113と接続し、西側のSD 110南北溝跡と合流しているものと推測される。

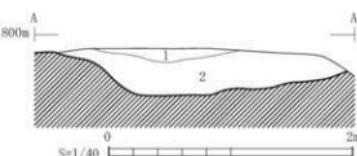
【重複】南半部で東西方向のSX 112小溝群と重複し、それよりも古い。また、大部分が擾乱に破壊されており、残存状況は悪い。

【方向・規模】方向は北で約10度東に偏している。規模は長さ45.5m以上、上幅は最も狭い箇所で1.3m、広い箇所では2.1m以上である。

【壁・底面】壁は非常に緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があるものの、およそ平坦である。

【埋土】2層に細分できる。1層は焼土・炭化物が多く混入する褐色粘質土（10YR4/4）、2層が灰白色火山灰が二次堆積するオリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3）である。

【遺物】出土していない。



第12図 SD 109 断面図

SK 80 土壌（第13・19図）

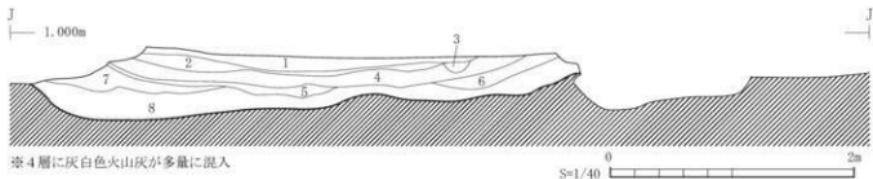
【位置】1区北端部で確認した土壤である。

【重複】SD 78・79と重複し、それよりも古い。

【平面形・規模】平面形は円形と考えられる。規模は西壁で測ると南北約3.6mであり、深さは約60cmである。以上である。

【壁・底面】壁は非常ぬ緩やかに立ち上がる。底面はやや凹凸があり、南側が深くなっている。

【埋土】土は8層に細分できる（第13図）。黒褐色または暗オリーブ褐色砂が主体であるが、4層に灰白



第13図 SK 80 断面図

色火山灰がブロック状に多量に混入している。

S X 99 土壙（第20図）

【位置】1区北端部で確認した浅い落ち込みある。

【重複】SE 84、SD 86と重複し、それらよりも古い。

【平面形・規模】平面形は東西に長い不正形である。規模は東西5.4m以上、南北1.8m以上、深さ約30cmである。

【壁・床面】壁は非常に緩やかであり、底面はおよそ平坦である。

【埋土】2層に細分できる。1層が褐色砂（10YR4/4）、2層が褐灰色砂（10YR4/1）であり、ともに灰白色火山灰が二次堆積している。

【遺物】須恵器土器杯が出土している。

1区の土壙群

1区中央から北半部で多数の土壙を確認した。ほとんどが直軸0.5～2.5mの楕円形または不整形のものであり、確認できた深さも2cm程度の非常に浅いものから、60cmのものまで様々である。壁は緩やかに立ち上がるものがほとんどであり、埋土はⅡ層と近似したものが大半を占めている。

遺物は、完形の須恵系土器が出土しているものもあるが、多くは小片の出土がほとんどである。

(3)まとめ

今回の調査では、八幡神社周辺を中心に古代・中世・近世の遺構・遺物を発見した。宮城県の試掘調査で確認されたような古墳時代後期にまで遡るものは未確認であり、面的な広がりはないものと考えられる。

以下、時代ごとに遺構の様子をまとめる。

① 古代

今回の調査で、明らかに古代と判断し得る遺構は、1区SK 80、S X 99、SD 89、20区SD 109がある。

SK 80は、重複関係で中世の遺構であるSD 78・79よりも古い土壙である。埋土中位に多量の灰白色火山灰が二次堆積していることから、10世紀前葉をさほど下らない頃のものと考えられる。

S X 99は、重複関係で中世の遺構であるSE 84やSD 86よりも古いことが明らかである。量的には少ないものの完形の須恵系土器杯が出土していることや、埋土中に灰白色火山灰が二次堆積していること、10世紀後半以降に出現するとされる小型杯が出土していないことを考慮すれば、およそ10世紀前半の範疇に収まるものと推測される。

SD 89は東西に延びる溝跡であり、中世のSD 86よりも古い。出土遺物は、須恵系土器壺・高台付壺・小型壺・小型高台付壺がある。大型のものは口径13.5～15.6cm、小型のものは8.2～9.2cmと法量分化が明確であり、特に小型のものは口径9cm前後に集中している。土師器は出土しておらず、破片も含め須恵系土器の小型のものが圧倒的に多い。小型壺の割合が高いことや、壺類の法量分化の明確化の点を考慮すれば、多賀城跡出土土器群では11世紀前半頃に位置付けられている政府SK 078と近い傾向を示している。小型高台付壺の有無など異なる点も認められるものの、およそこの頃のものと捉えておきたい。

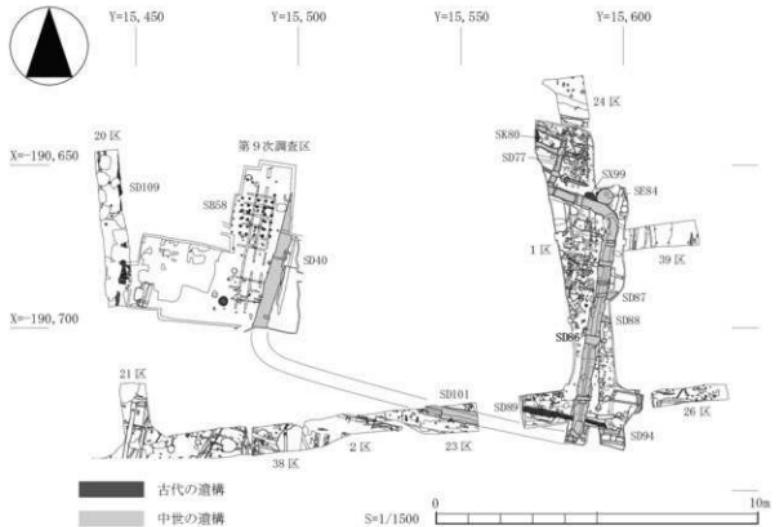
S D 109 は、南北に延びる溝跡である。ほとんどが擾乱により破壊されており、断片的に確認したに過ぎないが、埋土中に灰白色火山灰が二次堆積していることから、10世紀前葉以降の古代と考えておきたい。

ところで、今回の調査では、中世の区画溝である1区SD86の埋土中から、須恵系土器小型壺や柱状高台をはじめ、10世紀後半～12世紀代の土器類が多量に出土している。特に柱状高台は、岩手県泉屋遺跡で出土しているものと近似している。市内では多賀城跡第43次調査SX1375盛土整地事業出土土器などで出土例があるものの、本調査のようにまとまっての出土はこれまで確認されていない。また、平成27年に西側で実施した第9次調査では、11世紀頃のSK35土壤とともに、同時期のものと考えられるSB58四面庇付建物跡を発見しているほか、平成9年に実施した第3次調査では掘立柱建物跡3棟を発見しており、10世紀前葉以降の役所の可能性を示唆している。多量に出土している須恵系土器や近接する建物跡の規模等を考慮すれば、1区周辺には一般的な集落とはことなる空間が存在した可能性が高い。

② 中世

1区SE 84や、SD 81・86溝跡及びこれに接続するSD 77・87・88溝跡がある。

S E 84 は、縦板組の井戸側を持つ大規模な井戸跡である。側板倒壊を防ぐ目的で設置された横桟上面



第14図 古代・中世の遺構

から、元豊通寶・政和通寶（北宋錢）が出土しており、中世の範疇で収まるものと捉えられる。

S D 86 は 1 区中央部を縦断する、4 時期の変遷（A→D 期）がある溝跡である。北側で S D S D 81 とおよそ直角に接続し、さらに西に延びている。また、南端部では西に屈曲する状況を示しており、23 区 S D 101 や第 9 次調査 S D 40 とともに区画施設を構成する一連の溝跡であることが明らかである。上述したとおり古代の土器片が多数認められるものの、B 期埋土中から永樂通寶を含む差錢が出土していることから、B 期については 15 世紀以降のものと推測される。D 期についても埋土上層から 17 世紀後半頃の瀬戸窯捕鉢が出土しており、この頃にはほぼ埋没している状況が窺える。A 期については具体的な年代を示す資料は出土していないが、B 期以降も A 期の区画を踏襲していることから、B 期をさほど遡らない 15 世紀代の年代を推測しておきたい。

③ 近世以降

1 区 S K 85・97 をはじめ近世以降の溝跡、土壤が確認できるが、近世の遺構と近代以降の搅乱を厳密に区別できたものは少ない。

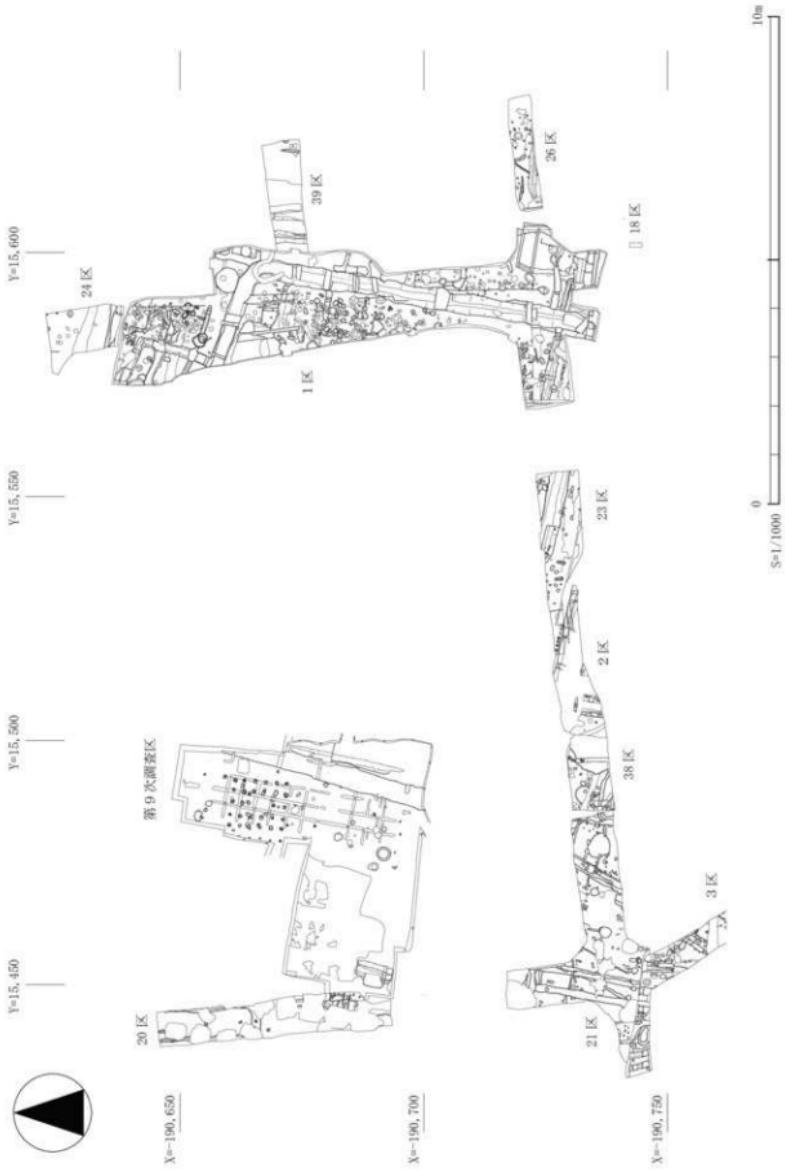
このうち、7 区では多数の柱穴を発見した。S B 70 以外は建物跡として組みきれないものが多いものの、埋土の状況や規模、方向などから判断すると、一連の建物跡の変遷と捉えることができる。出土遺物がなく年代決定の資料が得られない状況であったことから、S B 70 P 2 柱材について放射性炭素年輪年代測定を行い、科学的な分析を実施した結果、高い確率で 19 世紀以降であるとの報告を得ている（註 3）。

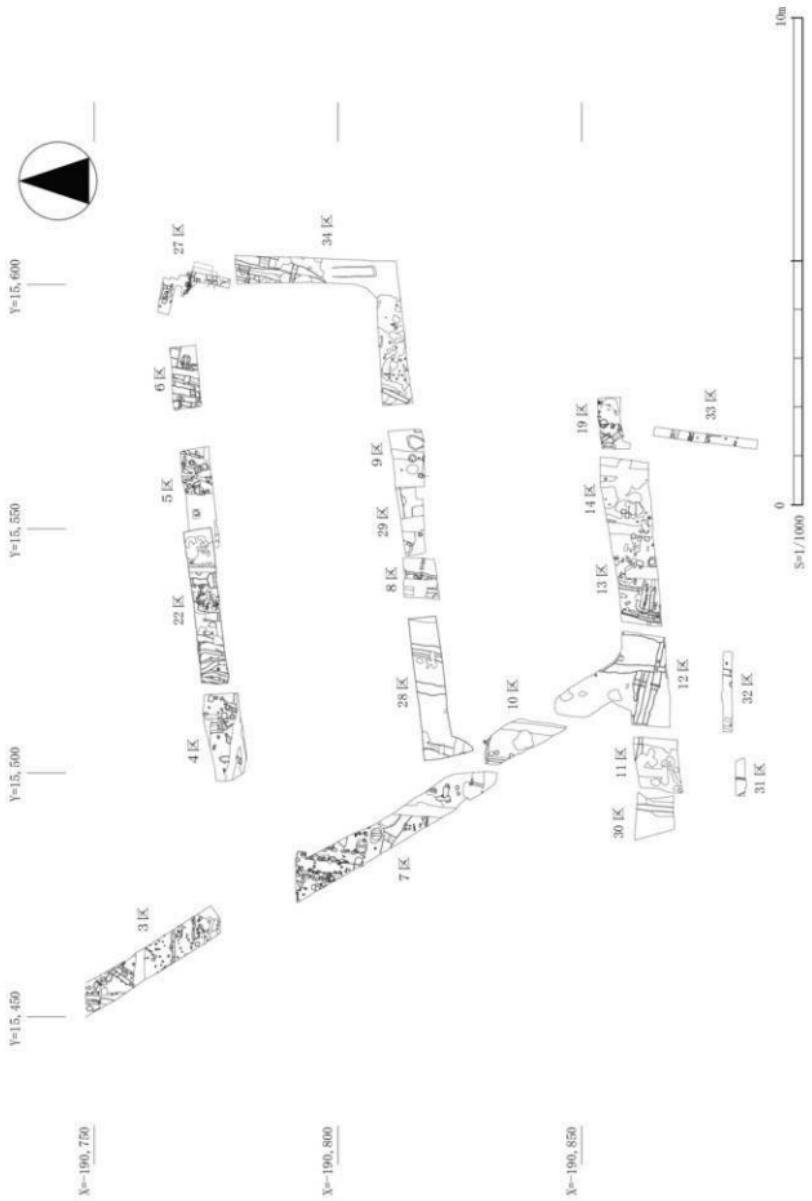
引用・参考文献

- 八峰 興「柱状高台考」『中世土器論集－中世土器研究会 20 周年記念論集－』2001
多賀城市教育委員会『八幡沖遺跡第 9 次調査』多賀城市文化財調査報告書第 125 集 2015
多賀城市教育委員会『八幡沖遺跡－第 13 次調査－』多賀城市文化財調査報告書第 131 集 2016
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 第 43 次調査』宮城県多賀城跡調査研究所年報 1983 1984
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政序跡 本文編』1982
宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡 政序跡 捕遺編』2010

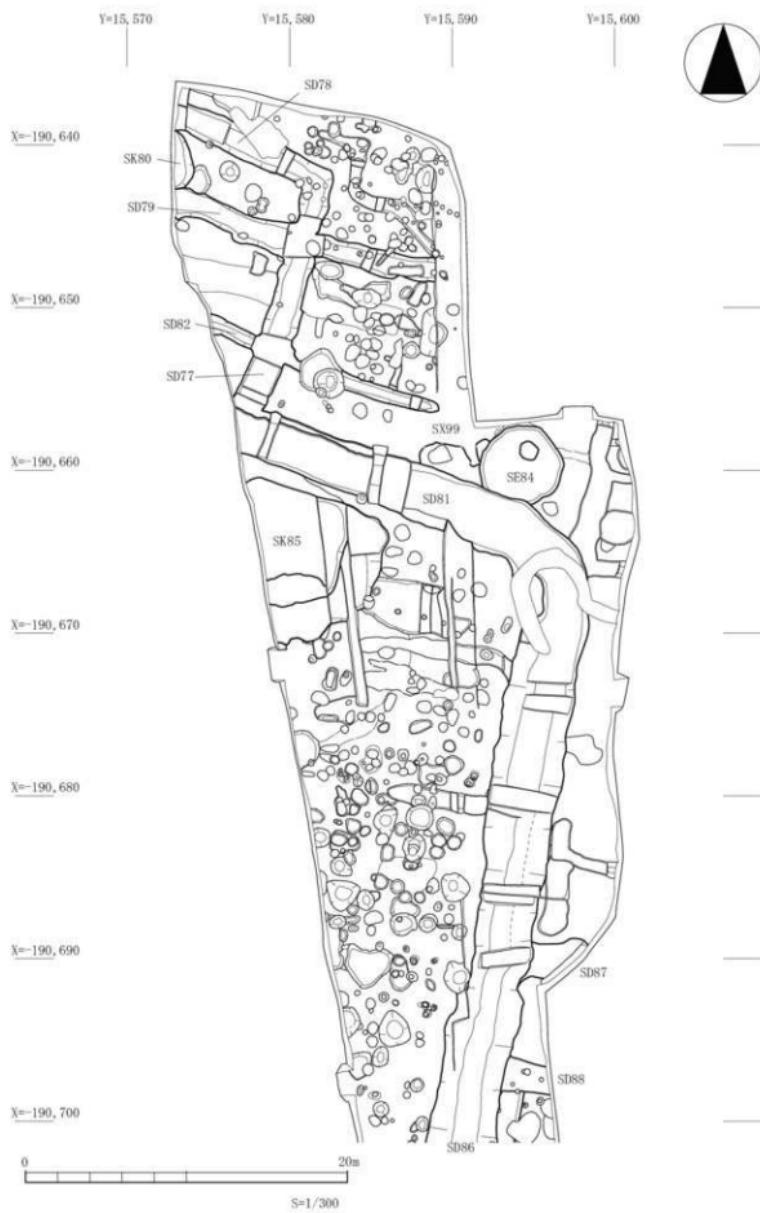
註 3：7 区 S B 70 P 1 柱材の放射性炭素年代測定の結果は、暦年構成年代で 1694calAD-1728calAD の範囲が 25.6%、1812calAD ~ 1919calAD の範囲が 69.8% の結果であり、19 世紀以降のものである可能性が非常に高い結果であった。

第15図 北半部遺構配置図

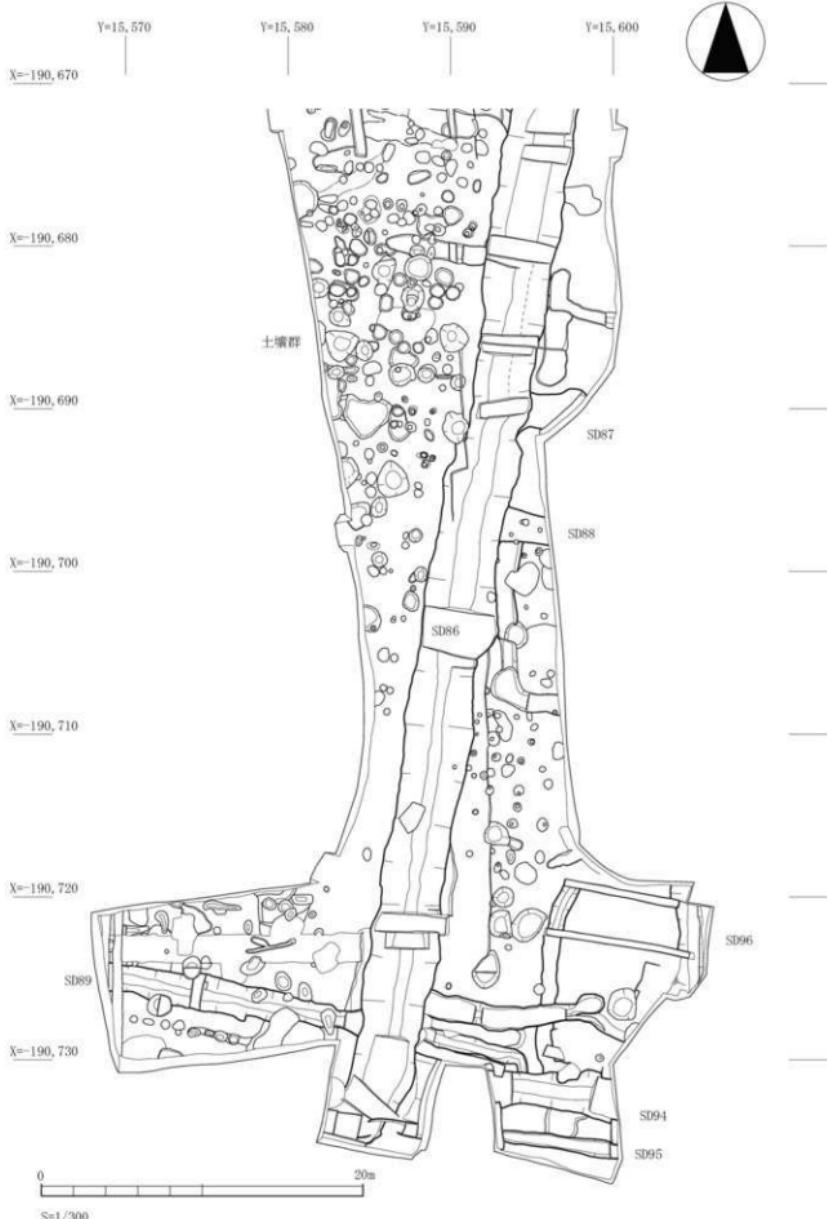




第16図 南半部遺構配置図



第 17 図 1 区北半部構造平面図



第18図 1区南半部遺構平面図

第19図 1区遺構平面図(1)



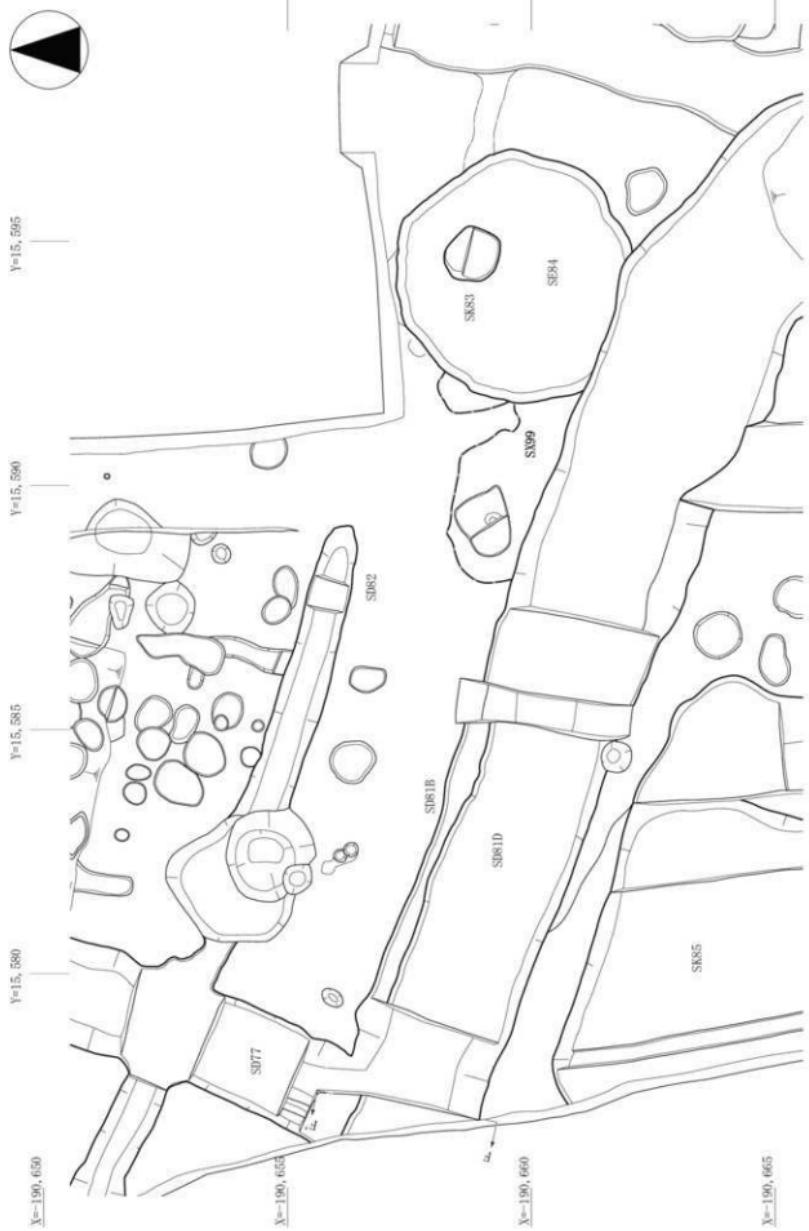
Y=15, 585
Y=15, 590
Y=15, 580
Y=190, 650
Y=190, 655
Y=190, 660
Y=190, 665

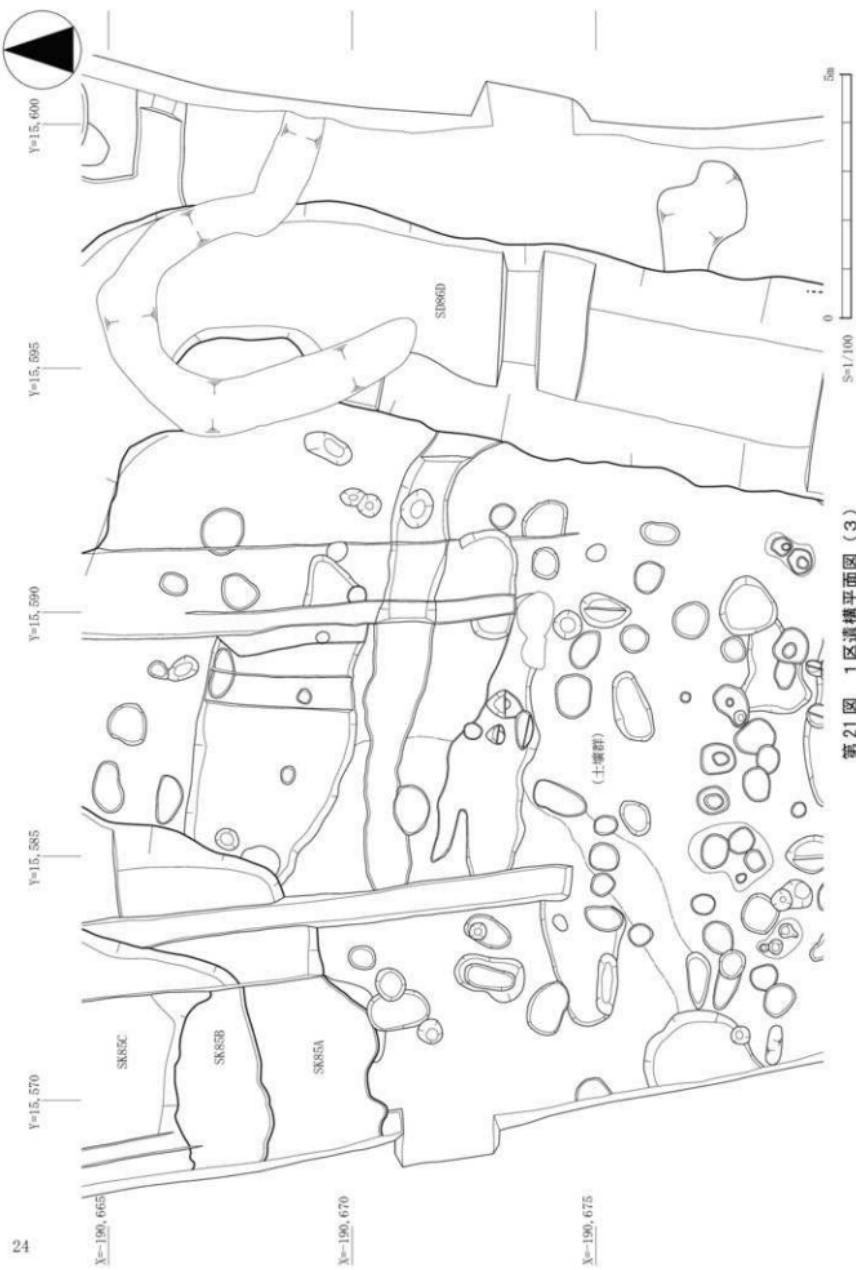
第20図 1区道構平面図(2)

23

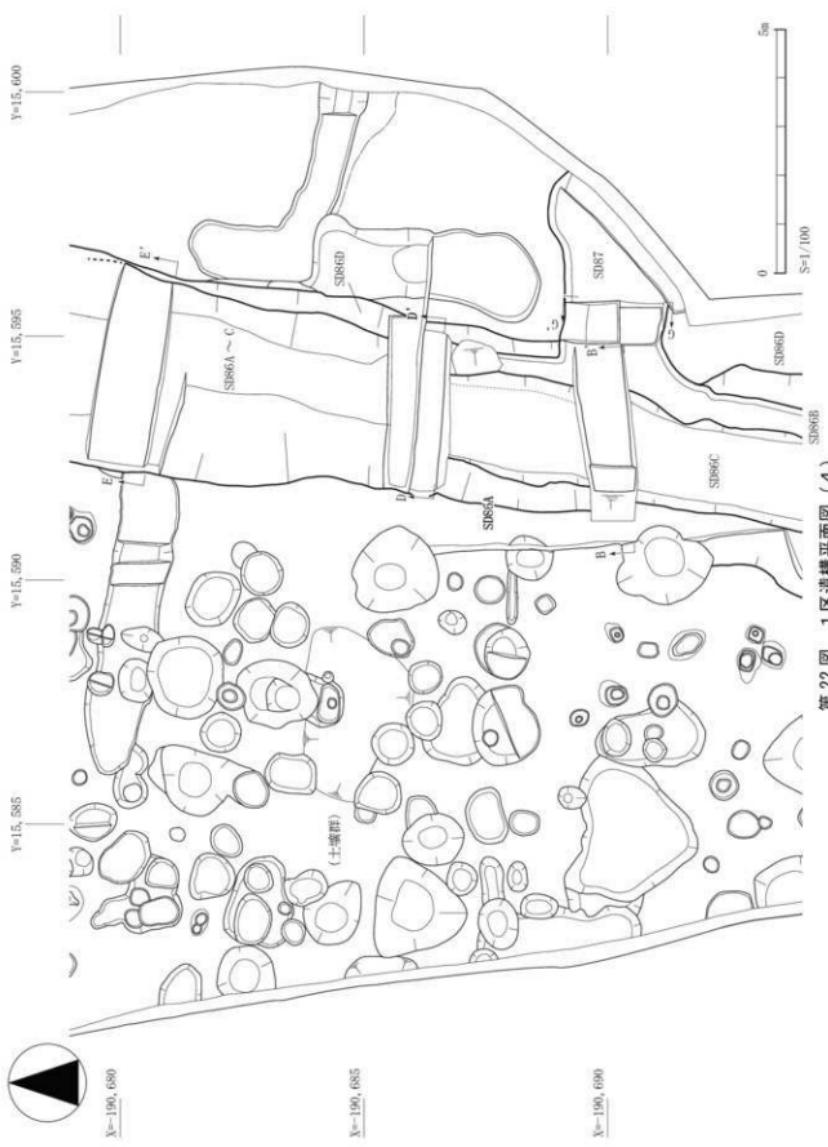
5m
0

S=1/100

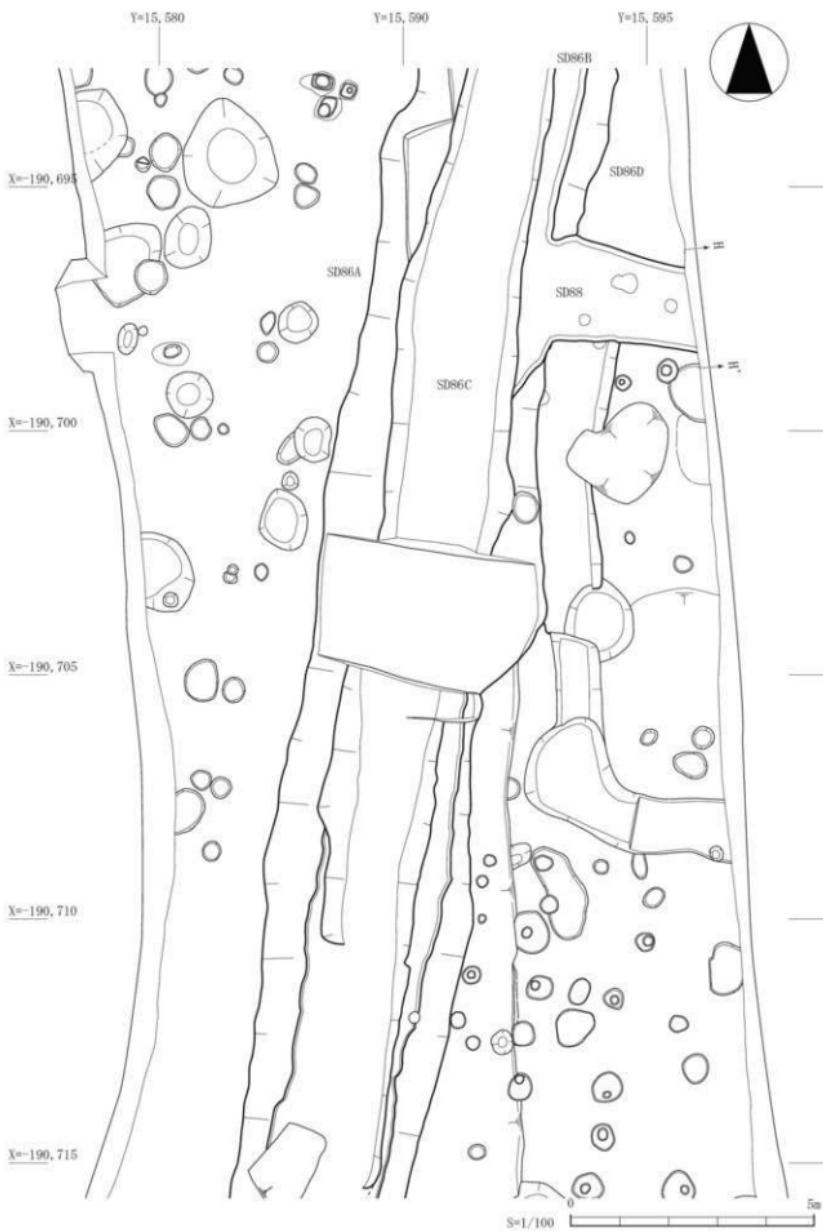




第21圖 1區遺構平面圖（3）



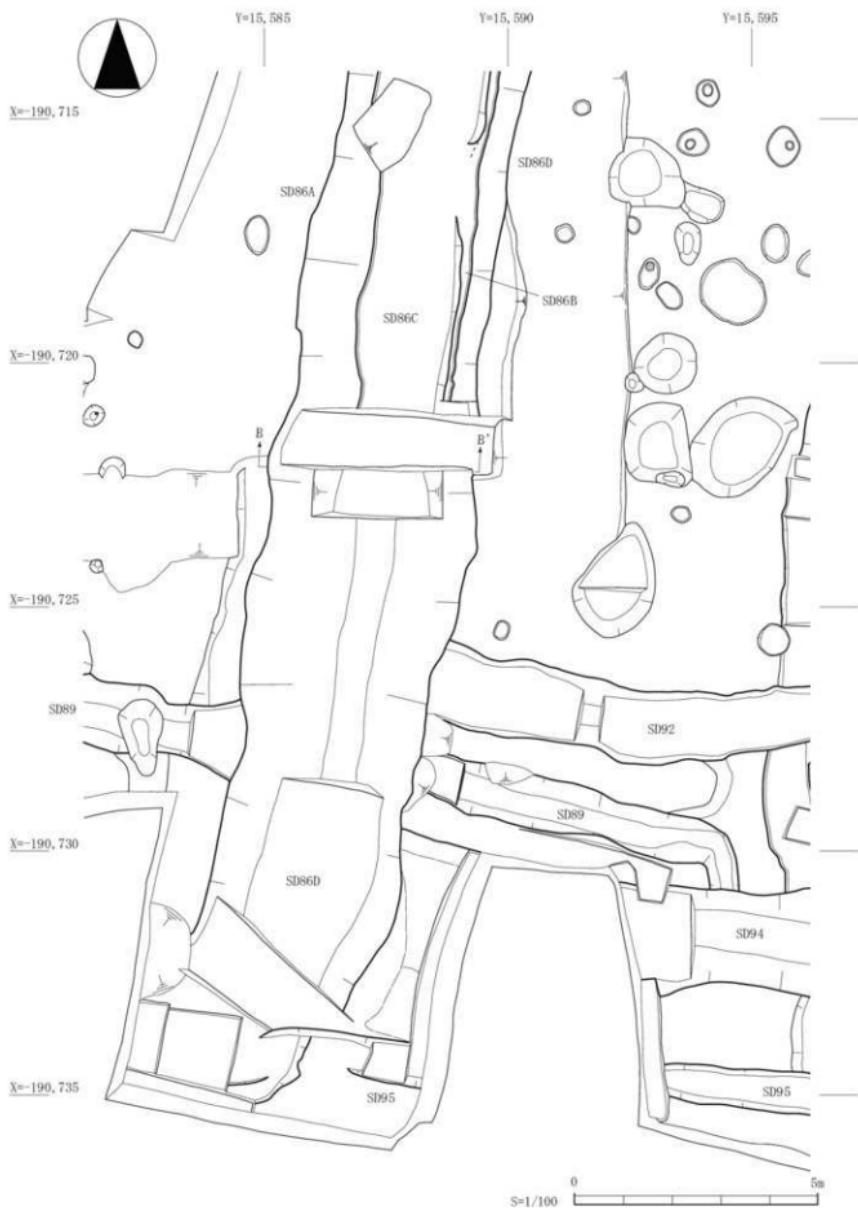
第22图 1区道路平面图 (4)



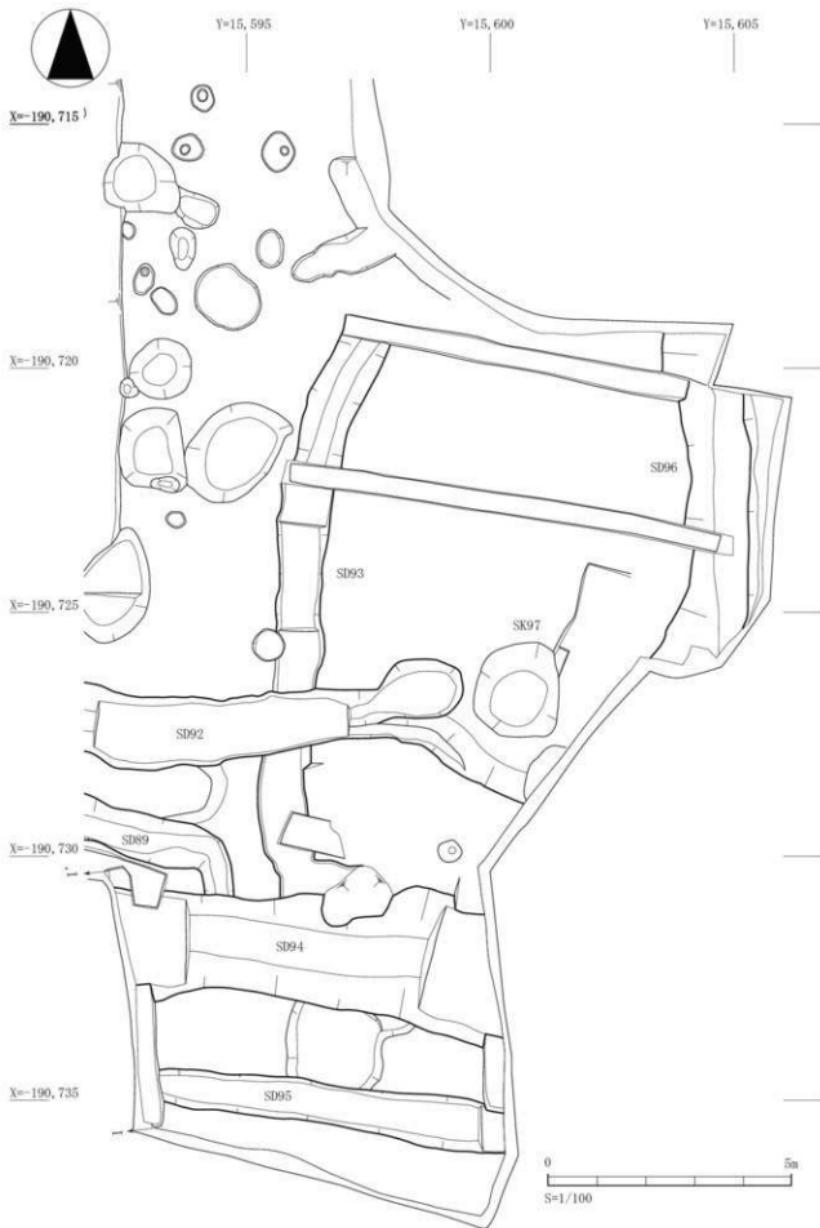
第23図 1区造構平面図(5)

第24図 1区遺構平面図 (6)

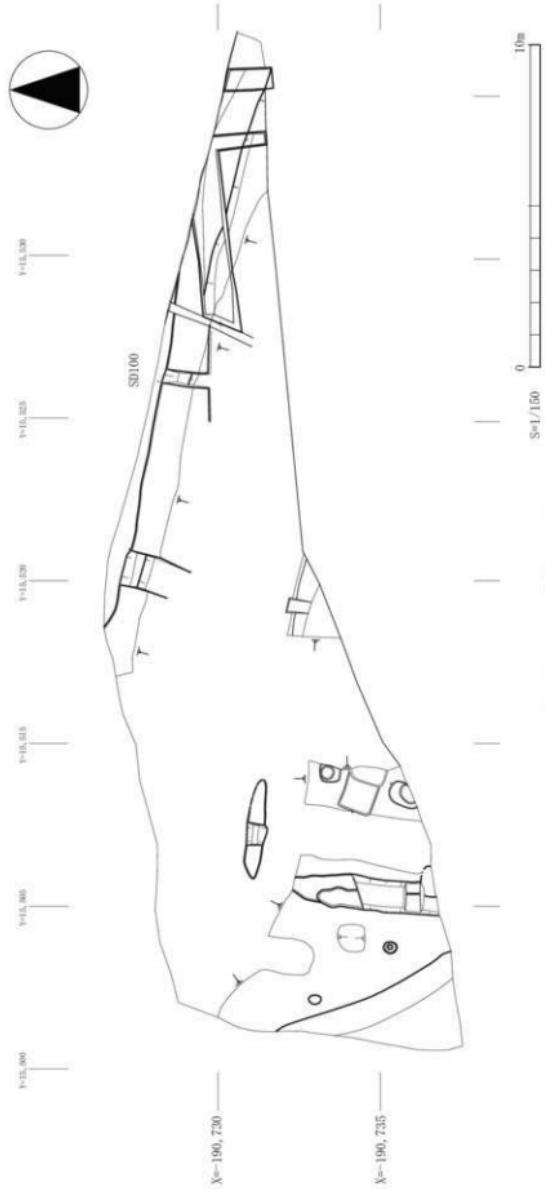




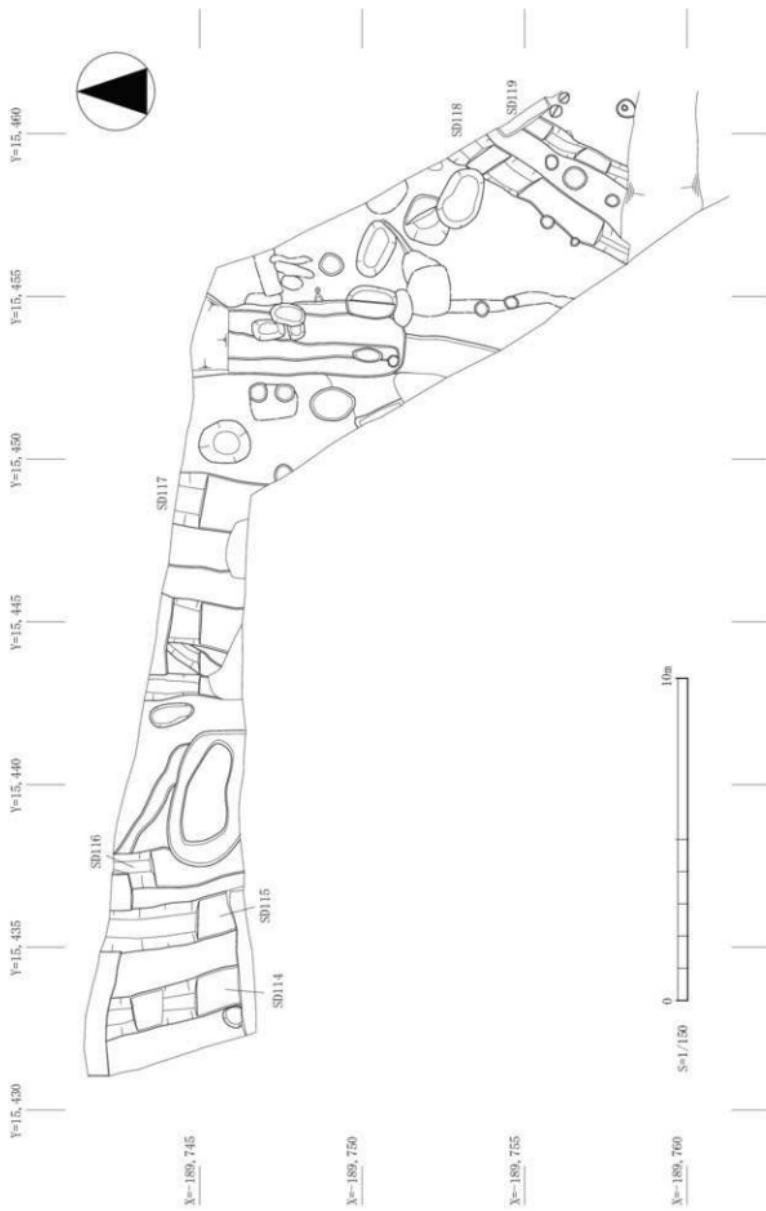
第25図 1区遺構平面図 (7)



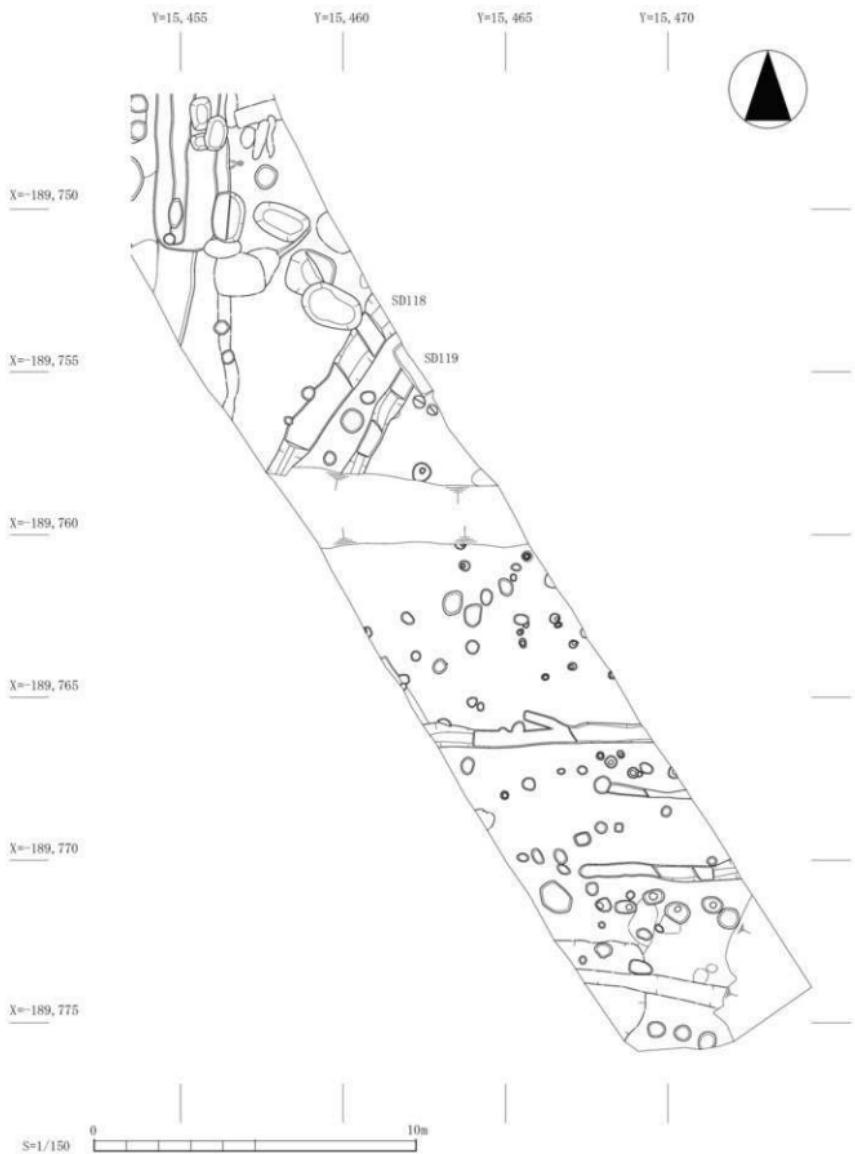
第26図 1区遺構平面図(8)



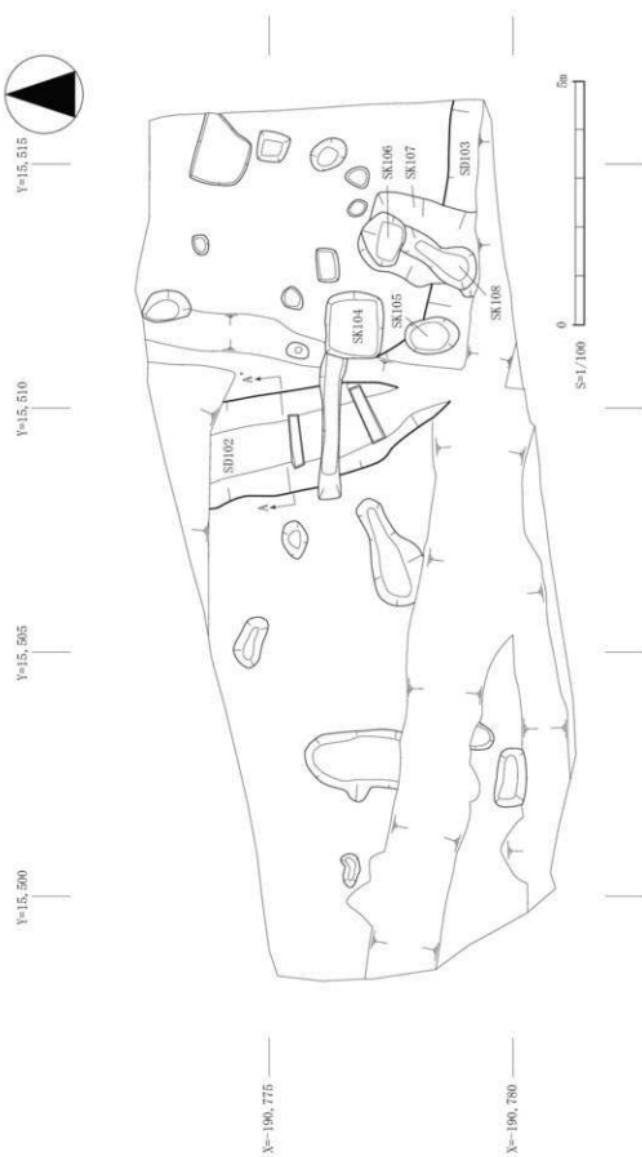
第27图 2区遗構平面図



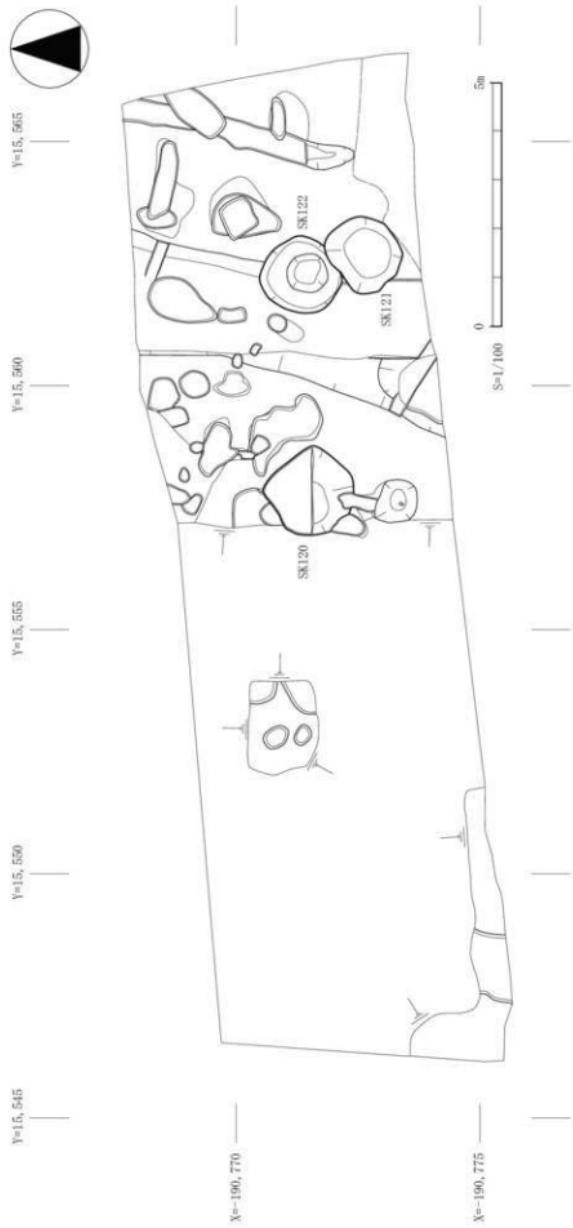
第28図 3区遺構平面図（1）



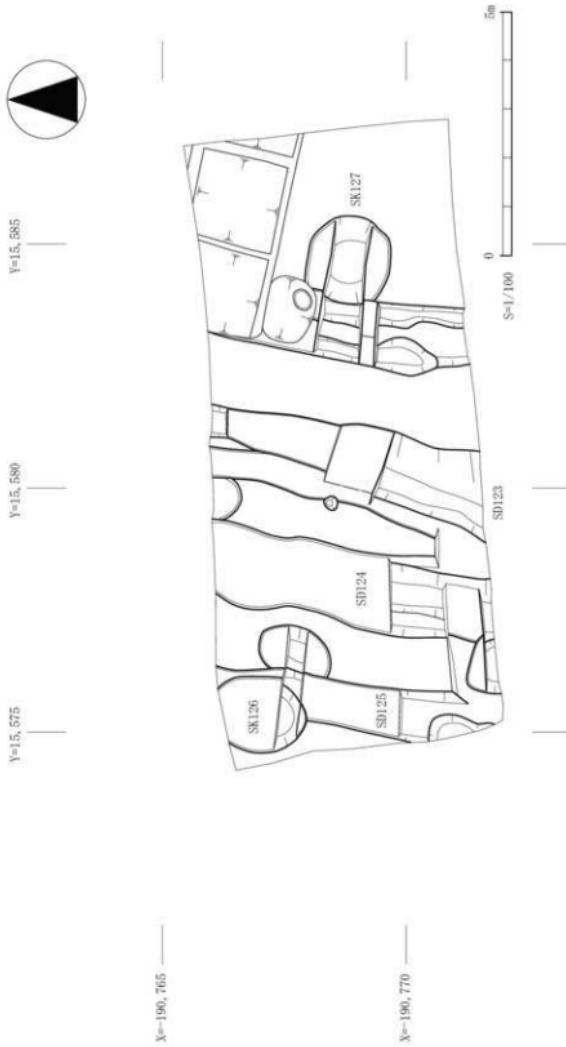
第29図 3区遺構平面図 (2)



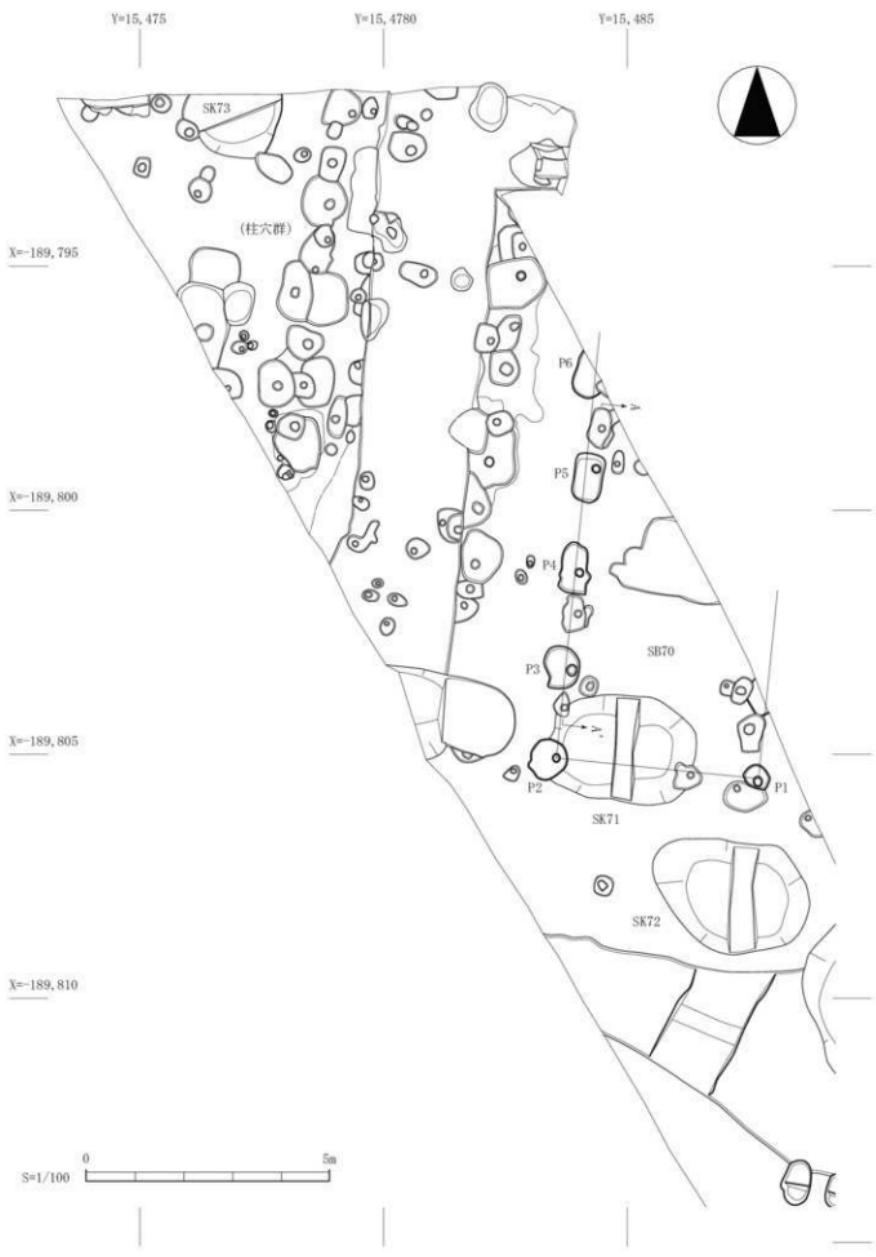
第30図 4区遺構平面図

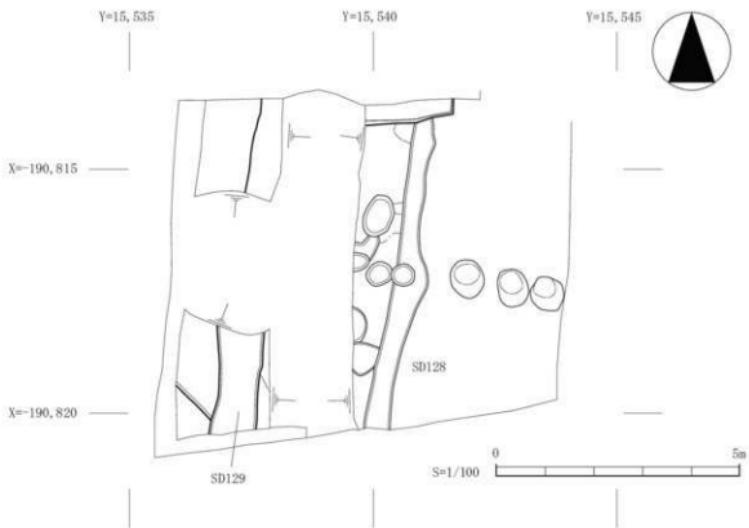


第31図 5区構造平面図

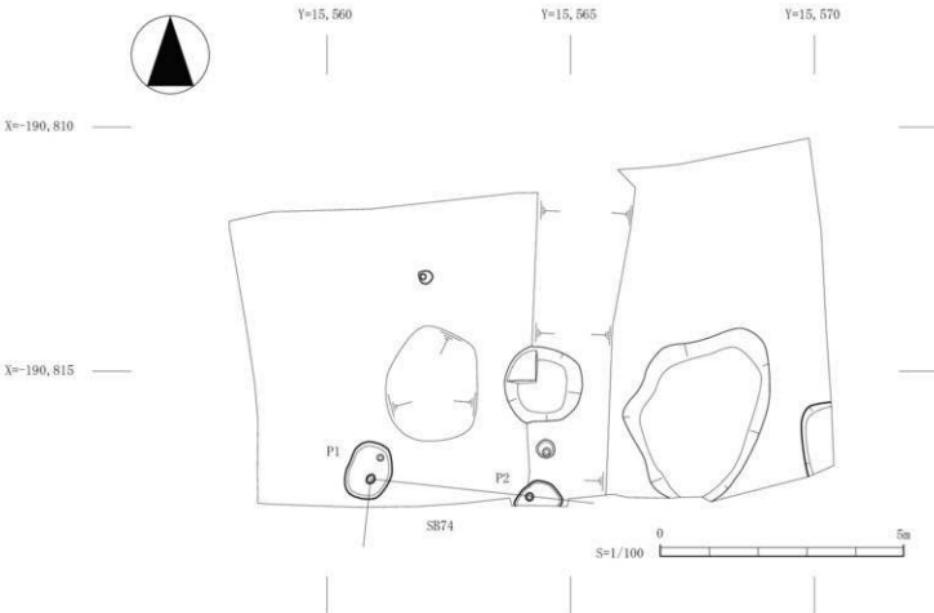


第32図 6区遺構平面図

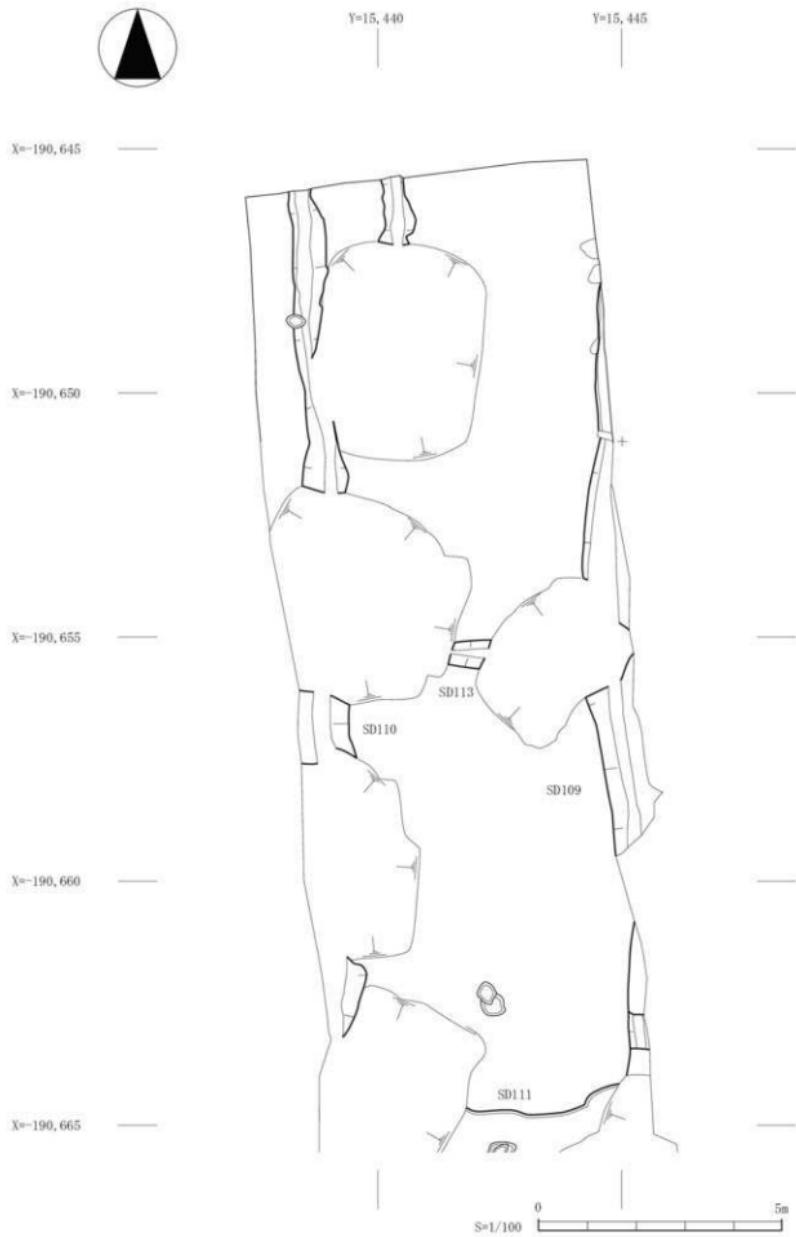


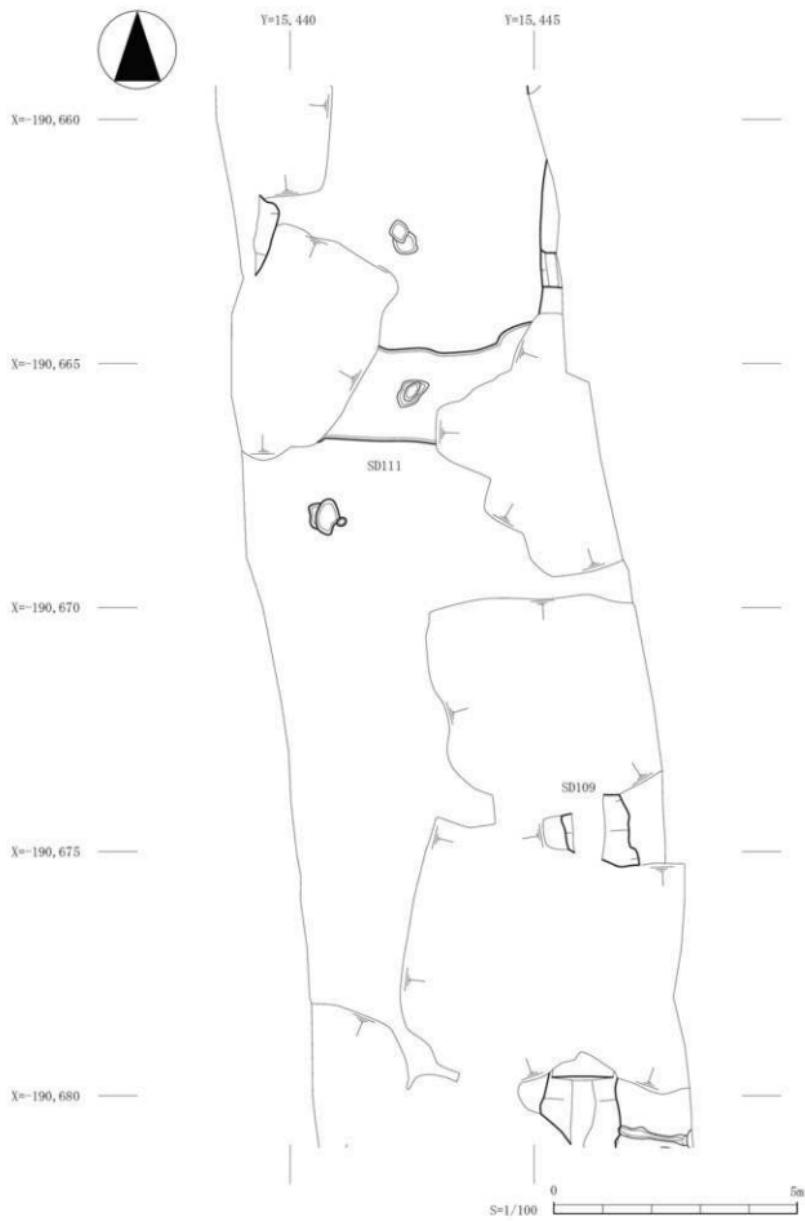


第34図 8区遺構平面図

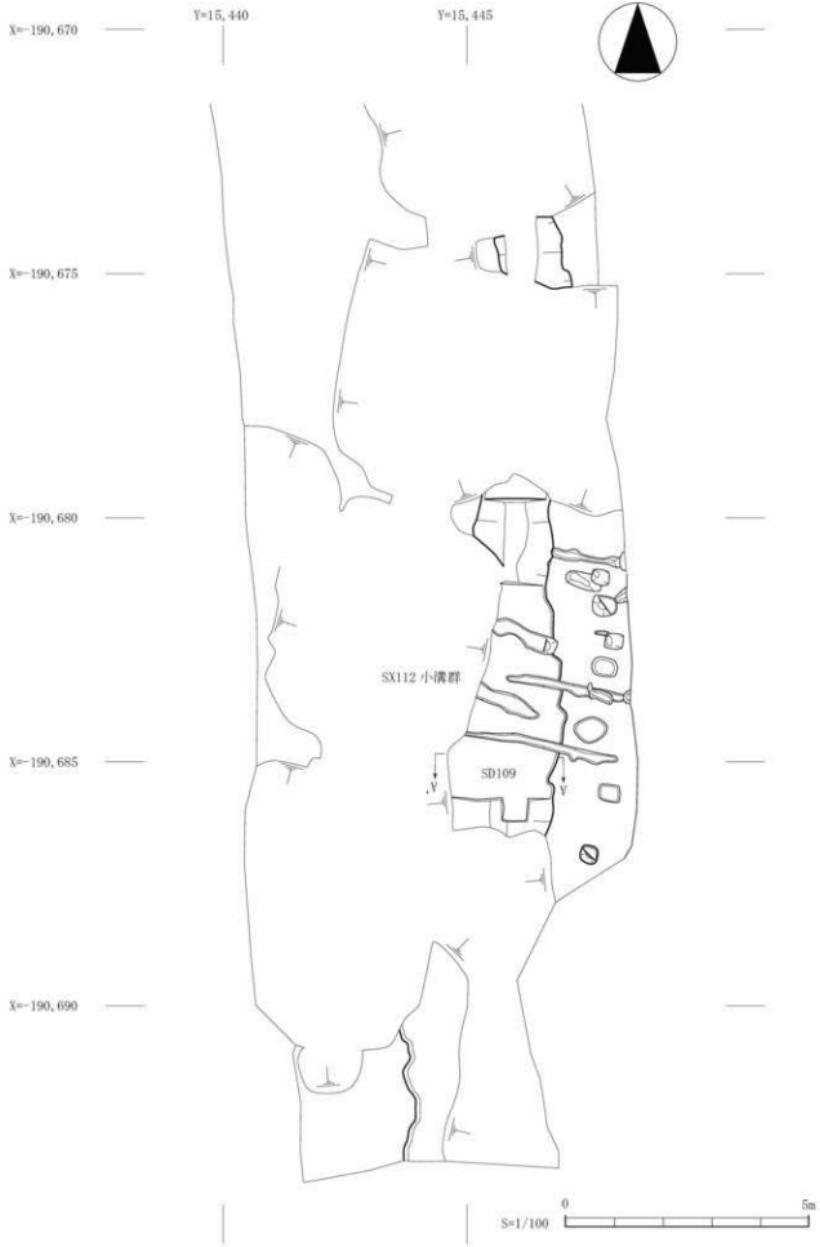


第35図 9区遺構平面図

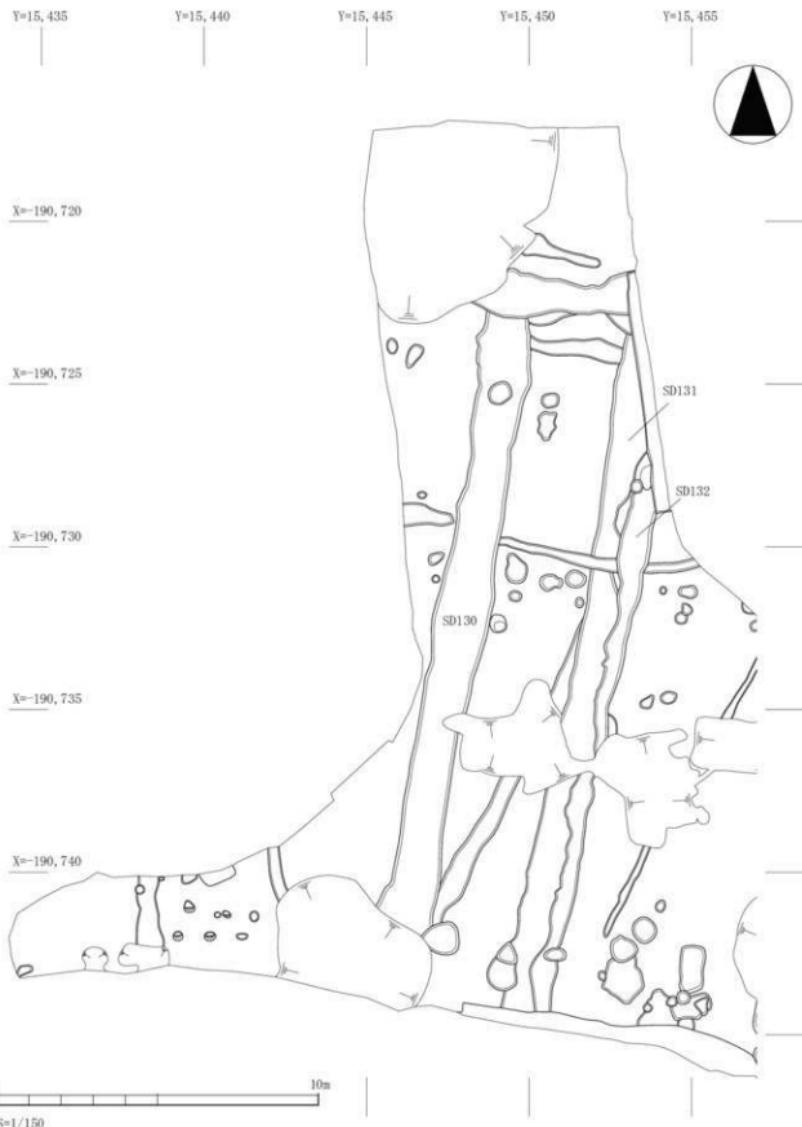




第37図 20区遺構平面図（2）

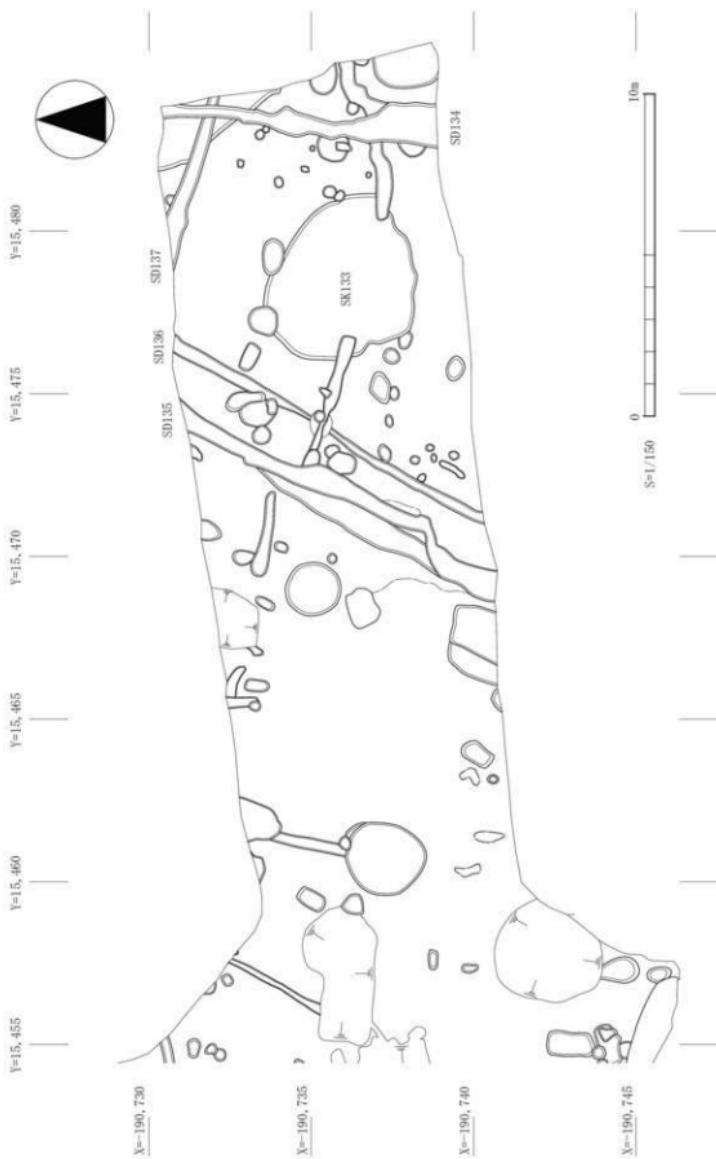


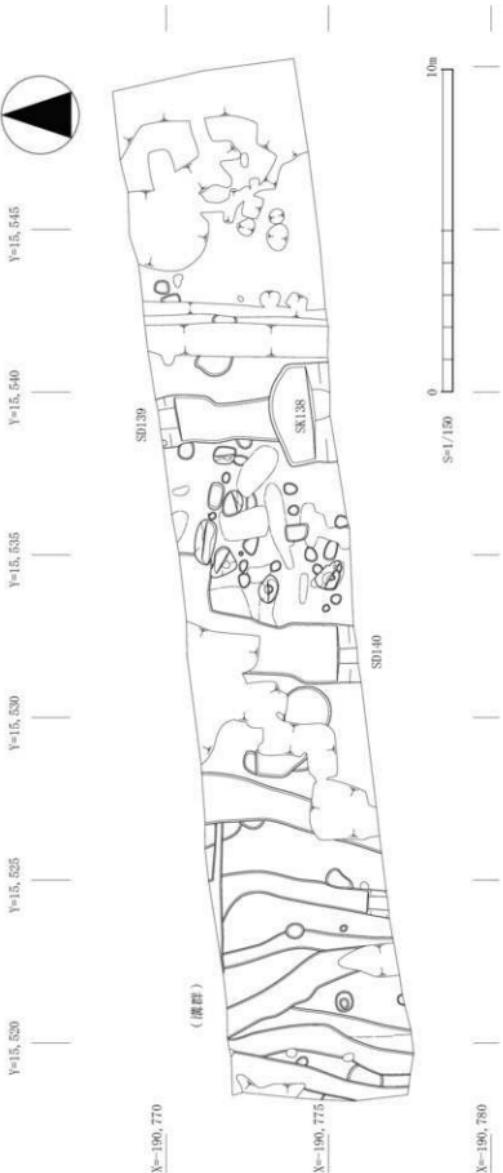
第38図 20区遺構平面図（3）



第39図 21区遺構平面図

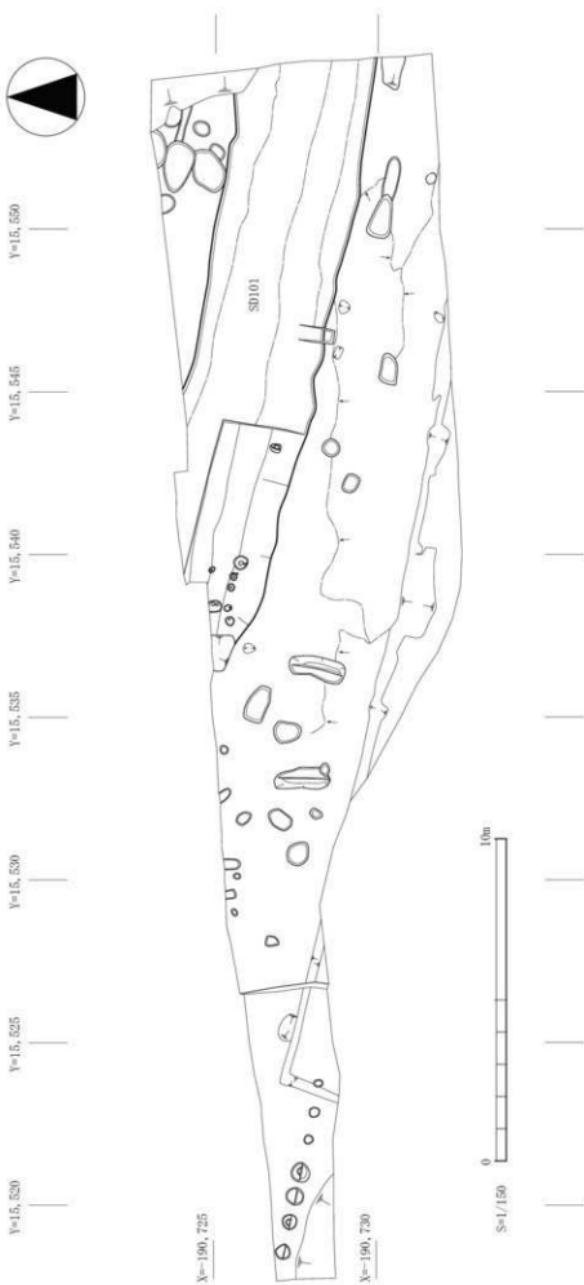
第40圖 21區遺構平面圖（2）

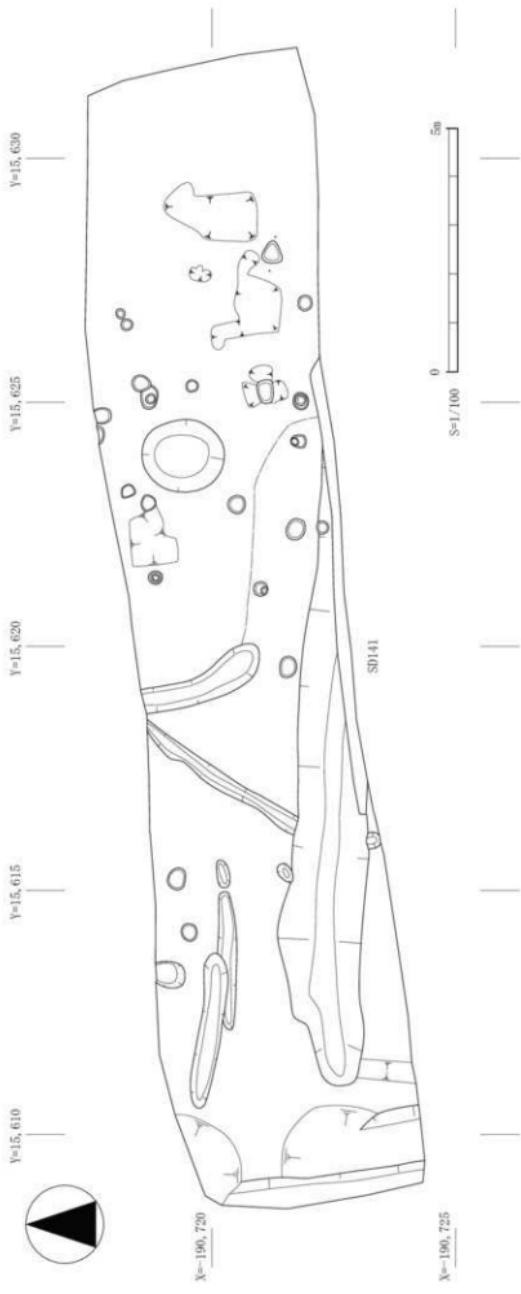




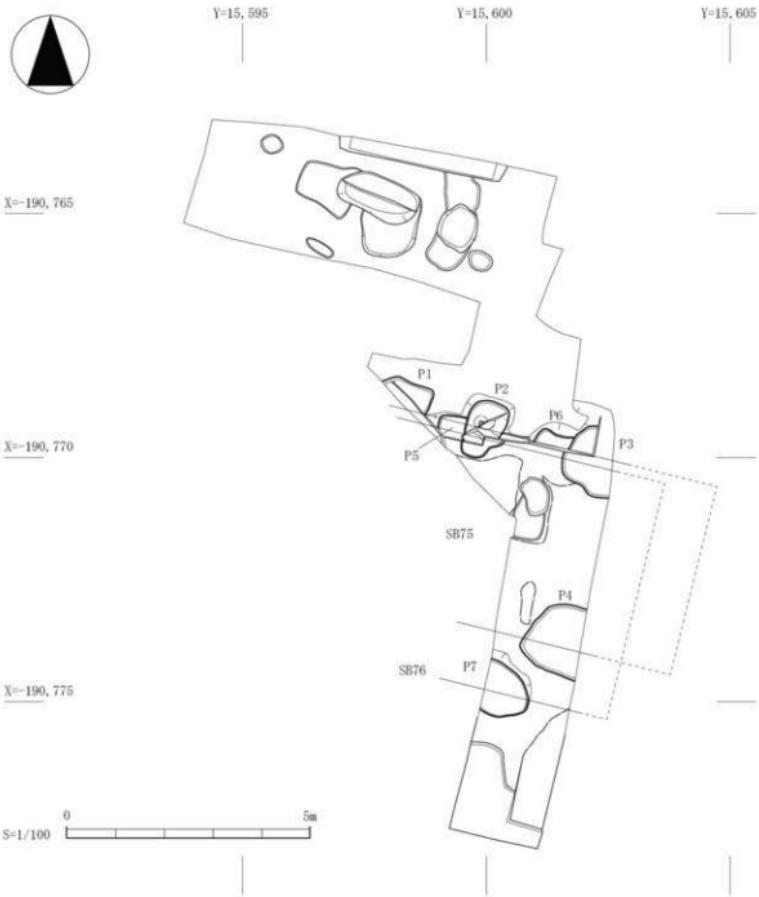
第41图 22区勘探平面图

第42圖 23區道構平面圖

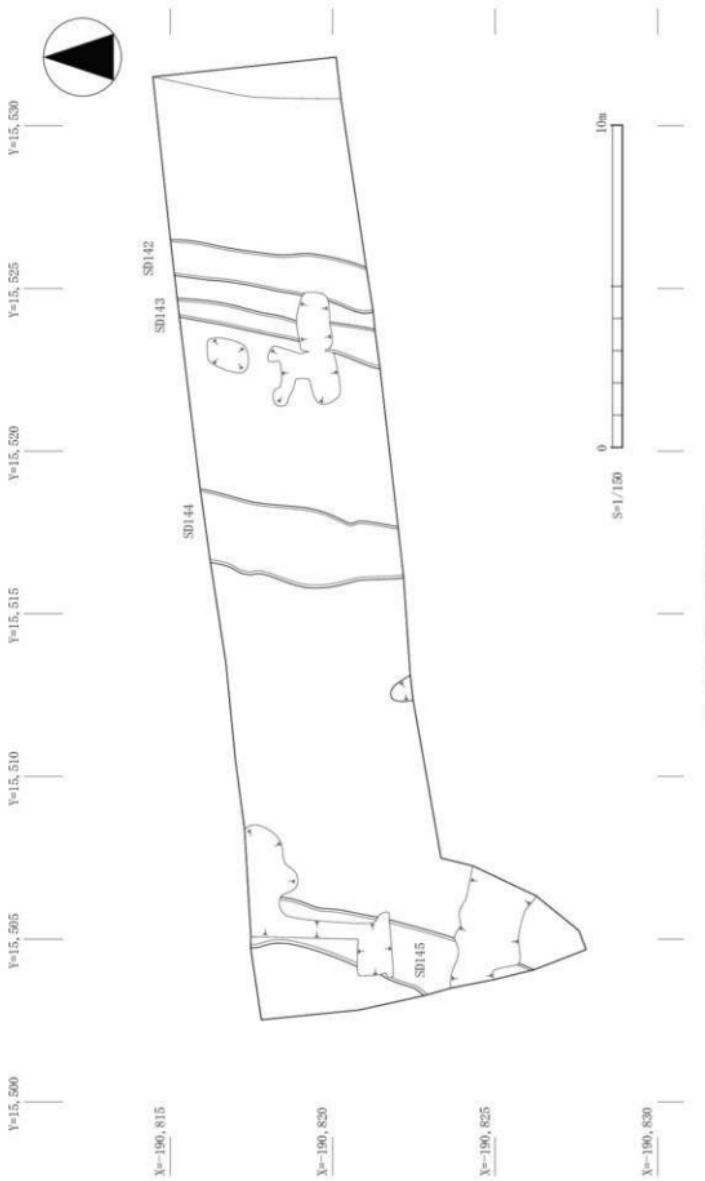




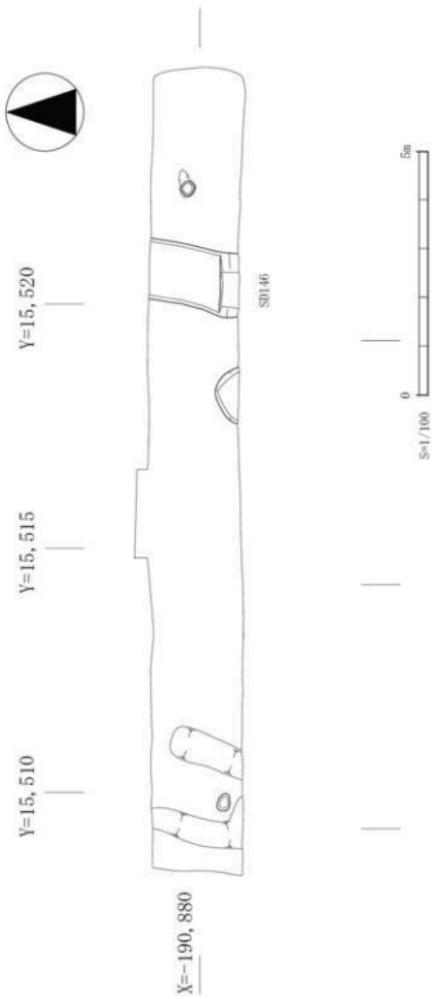
第43図 26区道路平面図



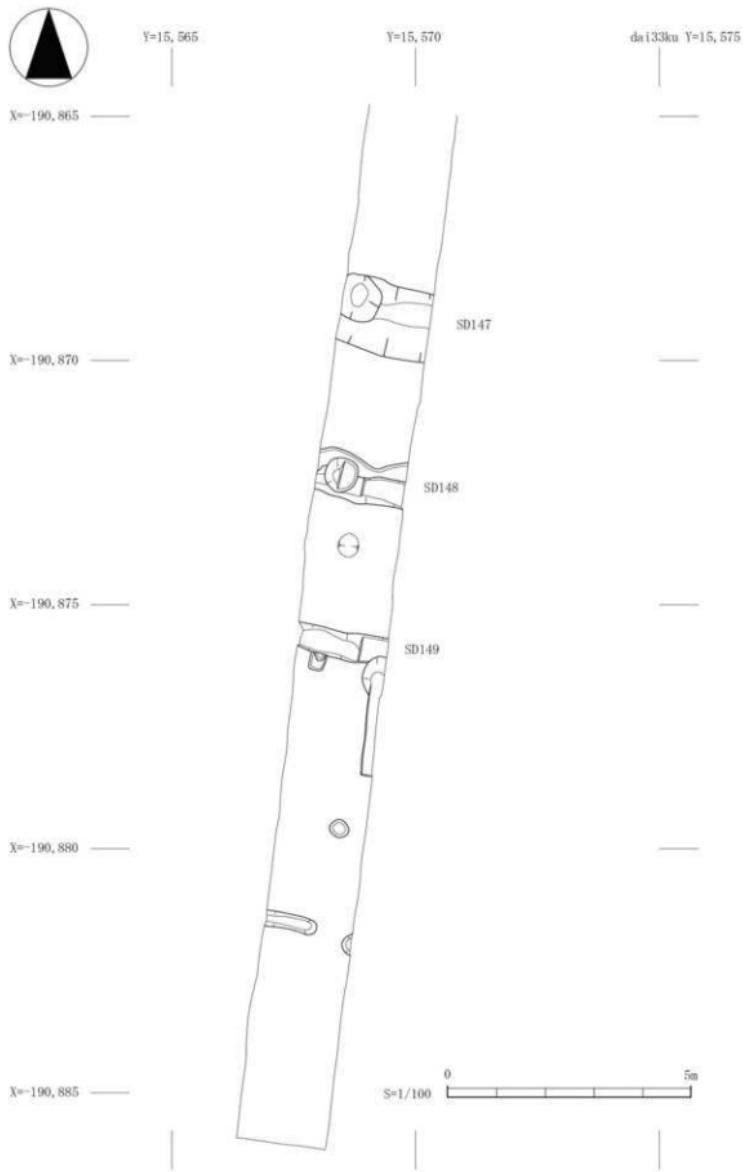
第 44 図 27 区遺構平面図



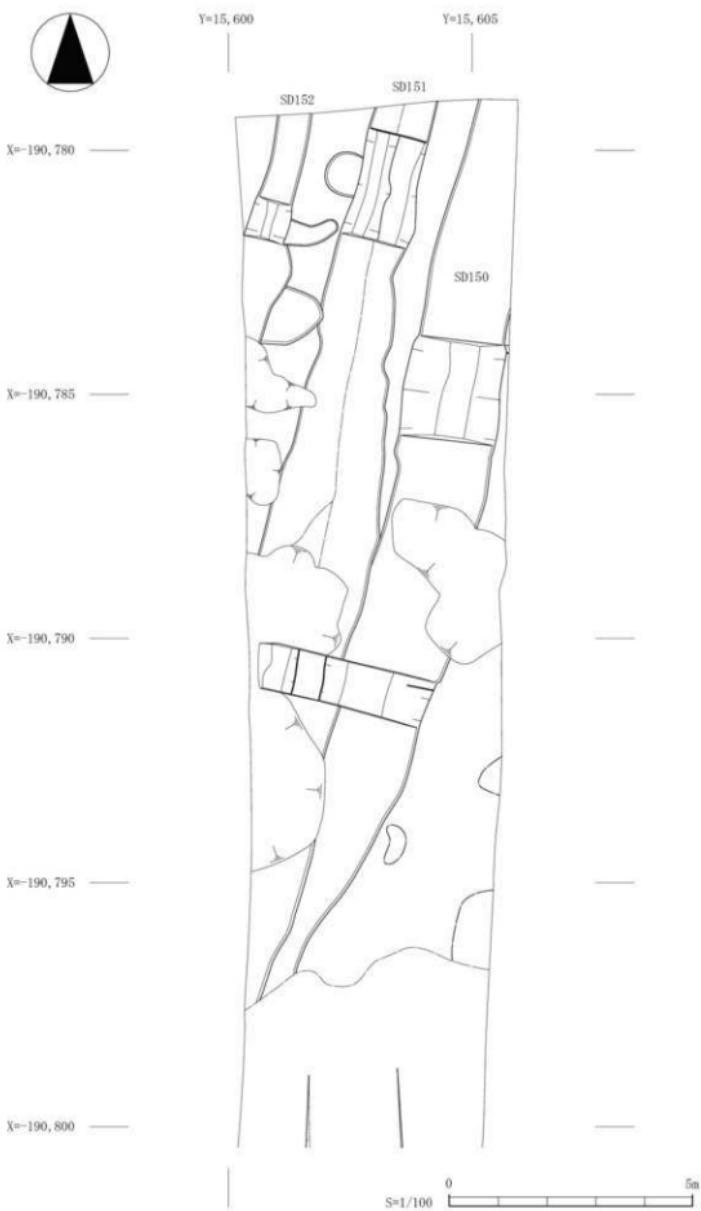
第45圖 28區遺構平面圖

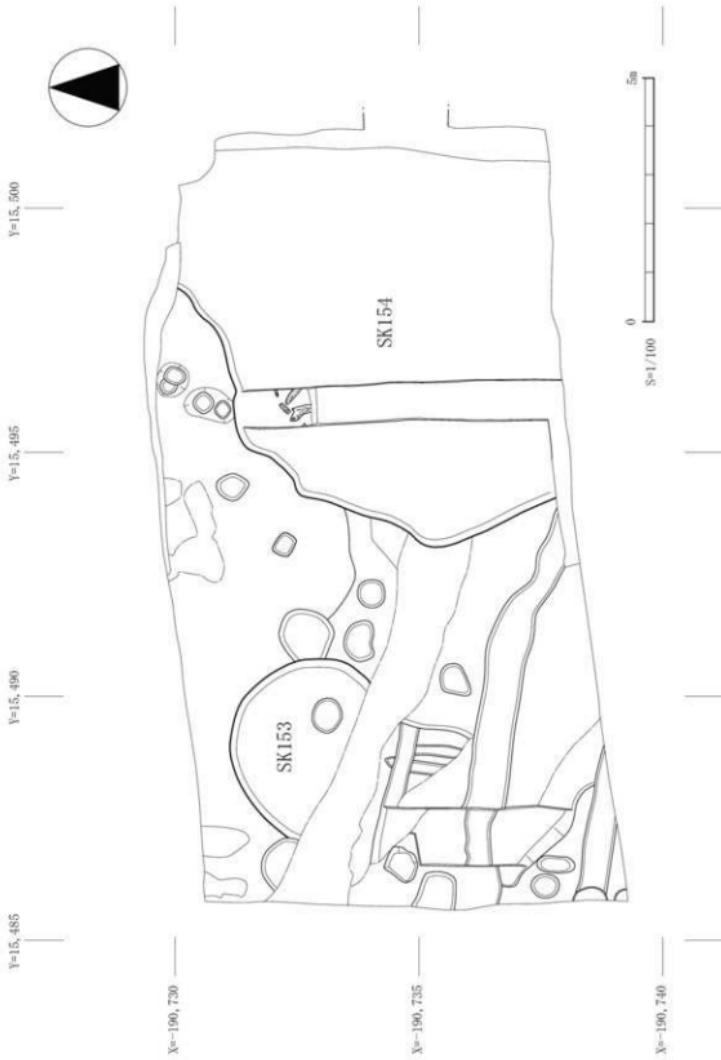


第46図 32区道牌平面図

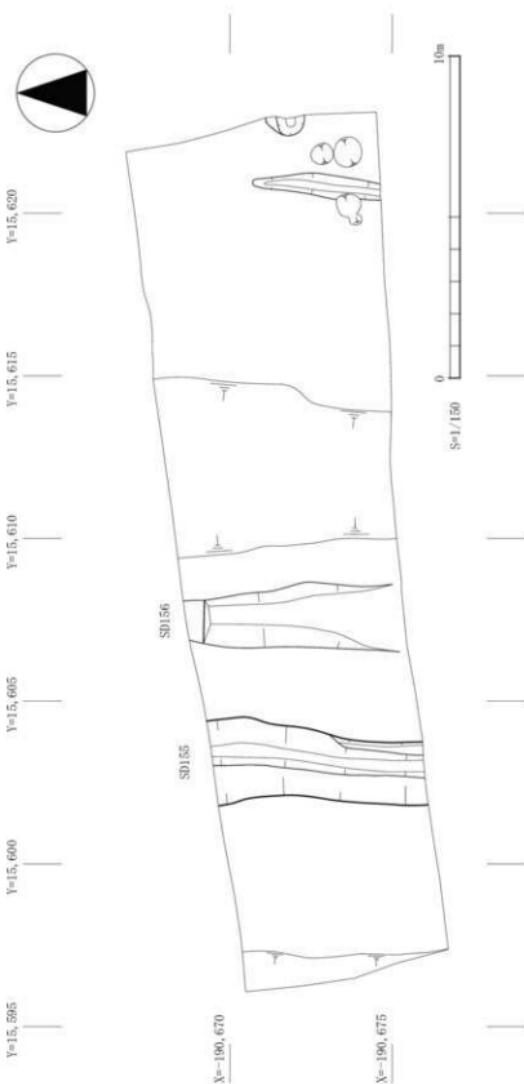


第 47 図 33 区構造平面図



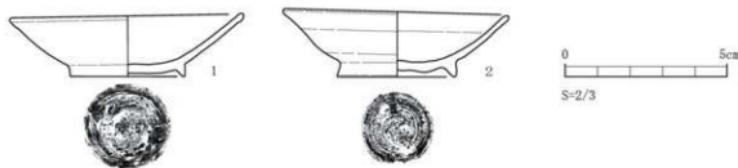


第49図 38区遺構平面図



第50圖 39區遺構平面圖

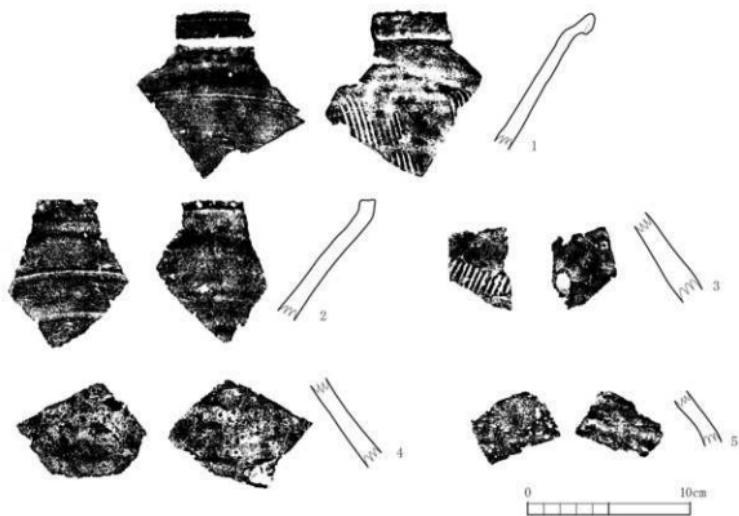
【SK157出土土器】



【SX99出土土器】



【SD86D期出土土器】

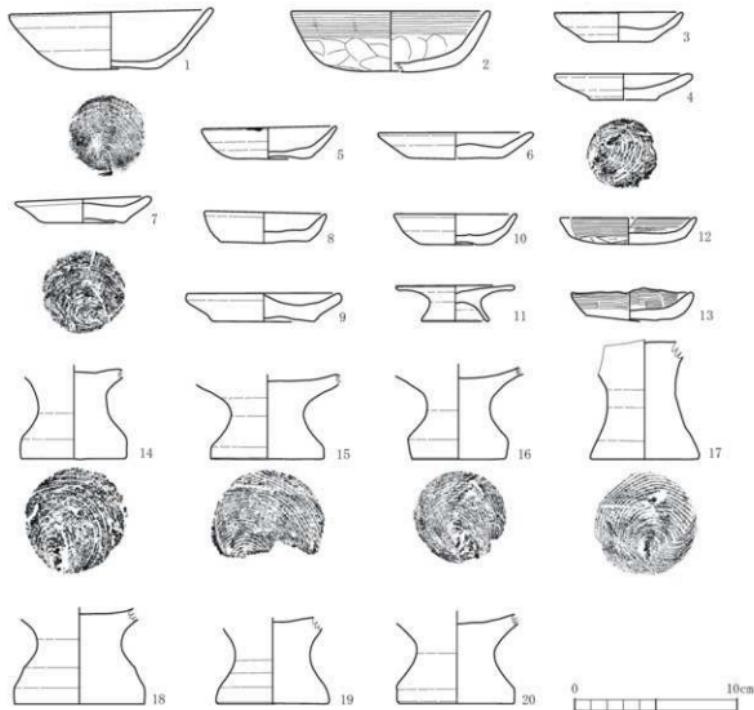


第1図 1区出土遺物（1）

【S D 86D 期出土古錢】



【S D 86D 期出土土器（別時期の混入と推測）】



【S E 84 出土古錢】



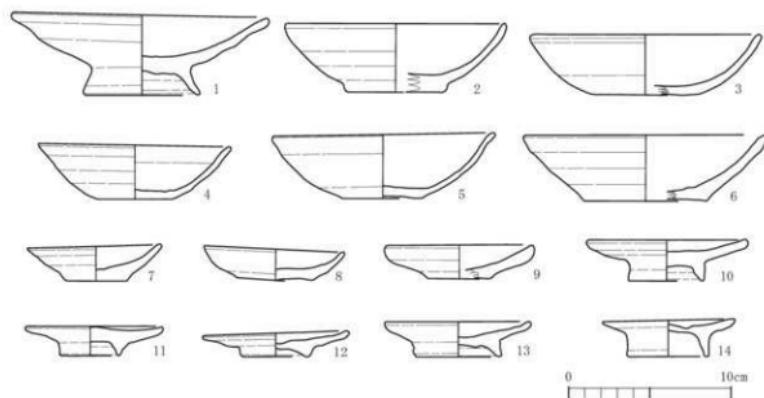
出土遺物観察表1

S E 84 出土古錢

番号	種類	部位	大きさ	写真 図版	登録 番号	備考
1	銭貨 政和通寶	側内	直径 一 厚さ 0.1	—	R6 (M)	初鉛 : 1111 年
4	銭貨 元豐通寶	側内	直径 2.35, 厚さ 0.1	—	R10 (M)	初鉛 : 1078 年

第 52 図 1 区出土遺物（2）

【SD86D期出土古錢】



第53図 1区出土遺物(3)

出土遺物観察表2

SK 175出土遺物

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	直徑 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
1	須惠系土器 高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	14.3 19/24	7.0 24/24	3.7	9-27	R129	
2	須惠系土器 高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	13.7 22/24	7.2 24/24	4.0	9-28	R130	

SX 99出土遺物

1	須惠系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	11.2 24/24	4.2 24/24	3.4	10-30	R136	
2	須惠系土器 高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	11.3 24/24	4.0 24/24	3.8	10-31	R137	
3	須惠系土器 高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	10.9 24/24	4.3 24/24	2.9	10-34	R138	

SD 86 D期出土遺物

1	陶器 植鉢	1層	ナデ 鉢口目	ナデ 鉢口目	—	—	—	10-33	R40	瀬戸窯・
2	無釉陶器 植鉢	1層	ナデ	ナデ	—	—	—	—	R36	
3	無釉陶器 甕	1層	ナデ	ナデ	—	—	—	—	R31	
4	無釉陶器 甕	1層	ナデ	ナデ	—	—	—	—	R35	
5	無釉陶器 甕	1層	ナデ	ナデ	—	—	—	—	R39	

SD 86 D期出土古錢

1	錢貨 紹聖元寶	1層	直径2.4、厚さ0.1					—	R2 (M)	初騎: 1094年
2	錢貨 天禧寶	1層	直径2.45、厚さ0.1					—	R3 (M)	初騎: 1017年
3	錢貨 政和通寶	3層	直径2.45、厚さ0.05					—	R4 (M)	初騎: 1111年
4	錢貨 至和元寶	3層	直径2.5、厚さ0.1					—	R5 (M)	初騎: 1054年

SD 86 D期出土土器(初期期の罫入と推測)

1	須惠系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	12.5 24/24	4.9 24/24	3.5	—	R24	
2	手づくね かわらけ	1層	ロクロナデ 底部:	ロクロナデ	(12.1) 4/24	(8.0) 11/24	3.7	—	R215	
3	須惠系土器 小型甕	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(7.8) 8/24	4.2 24/24	1.8	9-13	R16	

SD 86 D期出土土器(別時期の混入と推測)

番号	種類	層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
			外面	内面						
4	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(8.0) 8/24	4.2 24/24	1.6	9-14	R17	
5	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	8.3 24/24	4.6 24/24	1.9	—	R58	口縁部鉛煙付着
6	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(9.4) 4/24	(5.6) 11/24	1.6	—	R67	
7	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(8.4) 9/24	5.1 19/24	1.5	—	R68	
8	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	7.4 24/24	5.4 24/24	1.9	—	R81	
9	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	9.3 12/24	(6.2) 5/24	1.4	—	R82	
10	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(7.4) 5/24	4.4 16/24	1.9	—	R208	
11	須恵系土器 小型高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(7.2) 7/24	4.1 18/24	2.2	9-16	R20	
12	手づくね かわらけ	1層	体部:ヘラケズリ 一口縁部:ヨコナデ	ロクロナデ	(8.2) 3/24	(5.0) 3/24	1.5	—	R108	
13	手づくね かわらけ	1層	ヨコナデ→ヨコナデ	ロクロナデ	7.5 24/24	5.0 24/24	1.7	—	R22	
14	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-1	R1	
15	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-2	R2	
16	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-3	R3	
17	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-4	R4	
18	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-5	R5	
19	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-6	R7	
20	須恵系土器 柱状高台	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	—	—	—	8-7	R181	

SD 89出土土器

1	須恵系土器 高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	15.6 14/24	7.0 22/24	4.9	9-23	R94	
2	須恵系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(13.4) 6/24	5.8 12/24	4.2	—	R90	
3	須恵系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(14.0) 7/24	6.3 19/24	3.7	9	R92	
4	須恵系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	11.7 24/24	4.4 24/24	3.3	9	R97	
5	須恵系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	13.5 24/24	4.9 24/24	3.9	9	R98	
6	須恵系土器 杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(14.6) 3/24	7.6 21/24	4.1	—	R99	
7	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	8.2 12/24	3.8 24/24	2.1	9-17	R84	
8	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	8.6 18/24	4.6 24/24	1.9	9-18	R85	
9	須恵系土器 小型杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(8.9) 7/24	(4.0) 4/24	2.1	—	R87	
10	須恵系土器 小型高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	9.2 14/24	4.6 24/24	2.5	9-20	R93	
11	須恵系土器 小型高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	8.2 18/24	3.8 24/24	1.8	—	R91	
12	須恵系土器 小型高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	8.6 7/24	4.0 24/24	1.4	—	R95	
13	須恵系土器 小型高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	8.8 3/24	5.1 24/24	2.2	—	R86	
13	須恵系土器 小型高台付杯	1層	ロクロナデ 底部:回転糸切り	ロクロナデ	(7.9) 5/24	4.8 24/24	2.2	—	R218	



調査区遠景（南東上空から）



調査区遠景（西上空から）

写真図版 2



1区周辺遠景（南上空から）



1区全景（南東上空から）



1区 S D 86 掘下げ状況（南より）



1区 S X 99 須恵系土器出土状況（2）

写真图版 4



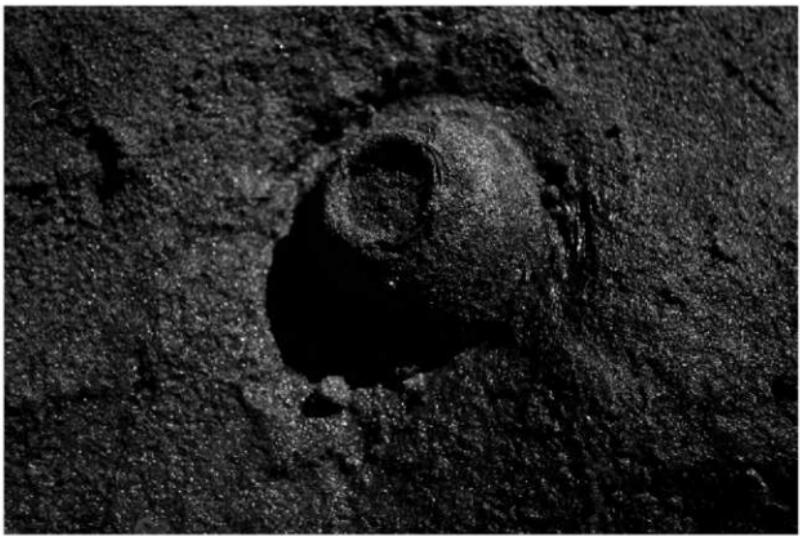
1区 SD 86 B期縕錢出土状況（1）



1区 SD 86 B期縕錢出土状況（2）



1 区 S D 86 B 期銅椀出土状況（1）



1 区 S D 86 B 期銅椀出土状況（2）

写真図版 6



1 区 S D 81 挖下げ状況（東から）



1 区 S D 81 断面（東から）



1 区 S E 84 検出状況（北東から）



1 区 S E 84 掘下げ状況（北東から）

写真図版8



1 : R 1



2 : R 2



3 : R 3



4 : R 4



5 : R 5



6 : R 7



7 : R 181



8 : R 8



9 : R 9



10 : R 13



11 : R 14



12 : R 15

1～9 柱状高台（S D 86 D）
10～12 須恵系土器（S D 86 D）

1区出土遺物（1）



13 : R 16



14 : R 17



15 : R 19



16 : R 20



17 : R 84



18 : R 85



19 : R 92



20 : R 93



23 : R 94



24 : R 97



25 : R 98



26 : R 99



27 : R 129



28 : R 130

13 ~ 16 須恵系土器 (S D 86 D)
17 ~ 12 須恵系土器 (S D 89)
27 ~ 28 須恵系土器 (K157)

1区出土遺物（2）

写真図版 10



29 : R 134



30 : R 136



31 : R 137



32 : R 138



33 : R 40

29 須恵系土器 (S K 158)

30 ~ 32 須恵系土器 (S X 99)

33 陶器擂鉢 (S D 86 D)

1区出土遺物 (3)



34 : WR 46



34 木製舟形代 (S D 86 B)
35 漆器椀 (S K 97)

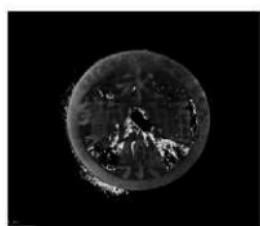
35 : WR 45

1 区出土遺物 (4)

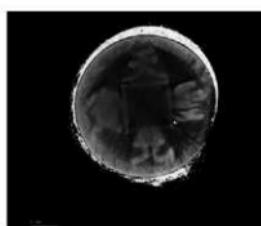


MR 12

36 銅製小型鏡 (S D 86 B期)



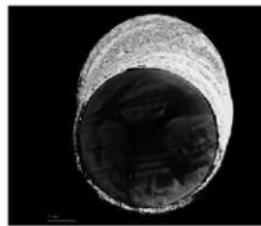
永樂通寶



天聖元寶



天聖元寶



紹熙元寶か

緡錢のX線CT画像

1区出土遺物（5）

報告書抄録

ふりがな	やわたおきいせき							
書名	八幡沖遺跡							
副書名	八幡沖遺跡第7次							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第140集							
編著者名	武田健市							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27-1 Tel: 022-368-0134							
発行年月日	西暦2018年3月23日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八幡沖遺跡 (第7次)	宮城県多賀城市 宮内一丁目地内	042099	18007	38度 16分 55秒	141度 00分 37秒	20160509 ~ 20160516	4,990 m ²	区画整理
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
八幡沖遺跡 (第7次)	集落	古代・中世・ 近世	井戸跡・溝跡 土壙	土器・陶器 木製・金属製品				
要約	11世紀前半の構跡や、15世紀以降の中世の区画溝等を発見した。また、混入遺物ではあるが、10世紀～12世紀代の遺物が多量に出土しており、一般集落とは異なった様相を呈している。							

多賀城市文化財調査報告書第140集
八幡沖遺跡
-第7次調査-

平成30年3月23日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話 (022) 368-1141

印刷 凸版印刷株式会社
仙台市泉区明通三丁目30番
電話 (022) 377-5211
